

# 寢鹿・契約壇遺跡 発掘調査報告書

1987

山形県  
山形県教育委員会

ねじかけいやくだん  
寝鹿・契約壇遺跡  
発掘調査報告書

昭和62年3月

山形県  
山形県教育委員会

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和61年度に実施した県道改良事業（高畠～川西線）にかかるる寝鹿・契約塙遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査では、古墳時代の溝跡、中世～近世の建物跡をはじめとする造構や数多くの遺物が検出され、置賜地方の古代から近世にかけての時代を考証するうえでの、貴重な手がかりを得ることができました。

これらの文化遺産は、私たちの祖先が自然環境と歴史の中で創造し、育んできたものです。これらを理解し、愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめることにもなると思われます。現代に生きる私たちは、これらを長く後世に伝え残していくことが重要な責務であると考えます。

近年、県内各地での開発事業の増加に伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。この両者の間には、様々な問題も介在していますが、生活文化の向上を目指すという同一の立場から調整をおこない、今後も埋蔵文化財保護のために努力を続けていく所存です。

終わりに、調査にあたって多くのご協力をいただきました山形県土木部道路建設課・米沢建設事務所・東南置賜教育事務所・高畠町・高畠町教育委員会・地元の方々に、心から感謝申し上げるとともに、本報告書が埋蔵文化財の理解を深めその保護普及の一助となれば幸いです。

昭和62年3月

山形県教育委員会  
教育長 小野 孝

# 例　　言

1. 本報告書は、山形県教育委員会が山形県土木部の委託を受けて、昭和61年度に実施した県道路改良事業高畠～川西線に係わる、寝鹿・契約塙遺跡（山形県遺跡地図1304・新規）の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、寝鹿遺跡が昭和61年5月12日から6月20日までの延24日間、ならびに契約塙遺跡が昭和61年6月18日から7月11日までの延16日間それぞれ実施した。

3. 遺跡の所在地は次のとおりである。

寝鹿遺跡 山形県東置賜郡高畠町大字夏茂字上寝鹿1926 外

契約塙遺跡 同 大字一本柳字契約塙2171 外

4. 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査）

同 佐藤 庄一（ 同 埋蔵文化財係長）

同・現場主任 佐藤 正俊（ 同 主任技師）

調査員 阿部 明彦（ 同 技師）

同 太田 優（ 同 瞠託）

事務局 事務局長 後藤 茂彌（ 同 課長）

事務局長補佐 芝野 建三（ 同 課長補佐）

事務局員 長谷部恵子・中嶋 寛・氏家 修一（同主事）

5. 発掘調査にあたっては、高畠町教育委員会、高畠町建設課、東南置賜教育事務所、米沢建設事務所、高畠町一本柳地区の外関係機関より多くのご協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

6. 本報告書の作成は、佐藤正俊・太田 優が担当し、両名の協議を経てII章・III章1・IV章1を太田 優、その他を佐藤正俊が各分担した。挿図・図版などの作成にあたっては、小沼末子・遠藤淑子・高崎くに子・柴崎マリ子・真柄美紀子・清水ひろみ・安達みゆき・岸 栄子・辻 広美・鈴木貴史がこれを補助した。編集は、長橋 至が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

7. 調査の諸記録、実測図、写真及び出土遺物などの全資料は山形県教育委員会が一括保管している。

## 凡 例

1. 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S K ……土壇 S D ……溝状遺構 S X ……性格不明遺構  
S B ……建物跡 E B ……柱穴 S P ……小穴
2. 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。
3. 遺物に付した記号は、R P（土器・土製品）、R Q（石製品）であり、遺構内での検出順にしたがって番号を付けた。
4. 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺構分布図・同実測図中の方位は、磁北を示している。
  - (2) 遺構実測図では、30分の1～240分の1他の縮尺で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
  - (3) 遺物の実測図では、土器は1/3、土製品・石製品は1/2で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
  - (4) 土器実測図の断面では、白ヌキが土師器、黒ベタが須恵器を表わしている。また土師器で内黒のものは内面右端に網点を入れた。
  - (5) 遺物観察表中の計測欄で( )内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。
  - (6) 遺物写真は、寝鹿遺跡が1/3、契約塙遺跡を1/2で採録した。遺物写真右下の数字は、遺物実測図番号である。

# 目 次

I. 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
II. 調査の経緯	
1. 調査に至るまでの経過	3
2. 寝鹿遺跡の調査の方法と経過	3
3. 契約壇遺跡の調査の方法と経過	4
III. 寝鹿遺跡	
1. 遺跡の概観	9
2. 検出された遺構	9
3. 出土遺物	23
IV. 契約壇遺跡	
1. 遺跡の概観	34
2. 検出された遺構・出土遺物	34
V. 調査のまとめ	
1. 寝鹿遺跡	39
2. 契約壇遺跡	40

# 挿 図 目 次

## 寝鹿遺跡

第1図 遺跡位置図	2
第2図 寝鹿遺跡全体図	5
第3図 契約壇遺跡全体図	6
第4図 契約壇遺跡明治年間地籍図	7
第5図 寝鹿・契約壇遺跡土層断面図	8
第6図 遺構配置図	10
第7図 15号土壤実測図	12

第8図	15号土壤遺物出土状況	13
第9図	土壤集成図	14
第10図	12・16・19号溝跡実測図	15
第11図	23号溝跡実測図	16
第12図	23号溝跡遺物出土状況	17
第13図	4・5号溝跡実測図	18
第14図	3・6号溝跡実測図	19
第15図	1・11号性格不明実測図	20
第16図	ピット集成図	21
第17図	土器実測図(1)	25
第18図	土器実測図(2)	26
第19図	土器実測図(3)	27
第20図	土器実測図(4)	28
第21図	土器実測図(5)	29
第22図	土器実測図(6)	30
第23図	土製品・石製品・石器実測図(7)	31
契約壇遺跡		
第24図	遺構配置図	35
第25図	建物跡実測図	36
第26図	溝跡実測図	37
第27図	ピット集成図	38

## 図版目次

### 寝鹿遺跡

図版1	遺跡位置	図版8	出土遺物(2)
図版2	検出された遺構(西側)	図版9	出土遺物(3)
図版3	検出された遺構(東側)	図版10	出土遺物(4)
図版4	遺物出土状況	図版11	出土遺物(5)
図版5	遺物出土状況	図版12	出土遺物(6)

図版 6 遺物出土状況	図版13 出土遺物 (7)
図版 7 出土遺物 (1)	図版14 出土遺物 (8)
契約壇遺跡	
図版15 遺跡位置	図版17 検出された遺構
図版16 検出された遺構	図版18 出土遺物

## 表 目 次

表－1 遺物観察表 (1).....	32
表－2 遺物観察表 (2).....	33

# I 遺跡の立地と環境

## I 遺跡の地理的環境

高畠町は、山形県の南部、米沢盆地の東端にある。東に奥羽山脈を境界とし、宮城・福島の両県に隣接し、北と南は丘陵地帯で上山・米沢市に接し、西は北流する最上川に限られ肥沃な水田地帯が展開している。町内を貫流する屋代川、和田川、松川などの主な河川はそれぞれ西進、北上し最上川に注ぎ上流部を形成している。寝鹿・契約塙の両遺跡は、高畠町の中心街から西方へ約1.5km、県道沿いに連なる一本柳集落の南側水田・畑地にあり、和田川の左岸の自然堤防上に立地、周辺の水田よりも一段高い微高地に在り、標高212m前後を測る。両遺跡とも地目は水田・畑地となっている。遺跡からは、肥沃な田園風景と遠くには蔵王、朝日、飯豊、吾妻などの峰々が眺望できる。

町の東、脊梁山脈と呼ばれる奥羽山脈から西に延びる山腹や丘陵地帯は、新第三紀初期ごろに噴出した火山岩や凝灰岩などの地層である。凝灰岩が露出する山腹の南面標高300m前後には、縄文時代草創期の国指定史跡である日向・一ノ沢・大立・火箱岩等の洞窟や岩陰遺跡群が密集している。さらに、屋代川を隔てて丘陵西端部の斜面には、7~8世紀代の円墳を主体とする北目・羽山・愛宕山古墳などが群集している。

町の中央は、屋代川や和田川によって開拓された小扇状地が形成され、その自然堤防上には、縄文時代の後・晩期や奈良時代から中世にかけて、奥羽山脈沿いの遺跡群と比べて新しい時代の遺跡群が遍在している。また町の北、南陽市と接する地域には吉野川や屋代川で限られた、大谷地と呼ばれる泥炭層が深さ100m以上にわたって堆積する泥炭特殊地帯が展開している。現在この地区で、押出遺跡の発掘調査が進められ地下2mより縄文時代前期の、特殊な構造を示す住居跡、木製品、植物遺存体など多く発見されている。また資料の理科学的分析によって、この付近一帯の自然・地理的環境が解明されつつある。

このような地理的景観を備えた高畠町は、県内でも豊富な遺跡や文化財があり、これらは町民の暮らしや風土によく融けこんで“まほろばの里”的名で広く知られている。

## 2 遺跡の歴史的環境

高畠町でこれまで確認された遺跡は約70箇所におよんでいる(山形県遺跡地図 1978)。

高畠町の東、奥羽山脈の山腹や丘陵地帯には、先史から古代における数多くの遺跡が点在する。この地帯は緑色凝灰岩が産する所である。この凝灰岩は風化しやすく先人が住むに適する洞窟や岩陰を形成し、縄文時代草創期の日向・一ノ沢・火箱岩・大立等の洞窟・

岩陰遺跡があり、また、山裾にはこの石を利用して構築した8世紀前後の横穴式石室を持つ安久津古墳群等がある。

平野部には、金谷・夏刈・上平柳・糠ノ目遺跡など縄文時代や奈良から平安時代にかけての遺跡が多く所在し、中でも国道南陽バイパス建設に伴う押出遺跡は縄文前期の泥炭湿地遺跡であり、特殊な構造を示す住居跡が多く発見されている。このように山腹や平地に居住した先人の自然環境を比較するうえで貴重な遺跡が豊富な町である。



遺 跡 一 覧

番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	裏面遺跡	自然堤防	古 墓	11	大立洞古墳	丘陵	縄文～平安
2	契約壇遺跡	自然堤防	中世～近世	12	日向洞窟	丘陵	縄文～奈良・平安
3	押出遺跡	沖積地	縄 文	13	東岡殿夷塚	沖積平野	奈良・平安
4	夏刈遺跡	自然堤防	奈良・平安	14	愛宕山古墳	丘陵斜面	古 墓
5	糠ノ目遺跡	自然堤防	奈良・平安	15	明神崎遺跡	沖積地	奈良・平安
6	糠森遺跡	冲積平野	縄 文	16	芦垣遺跡	冲積平野	弥 生
7	銀岸山遺跡	冲積地	縄 文	17	北首古墳群	丘陵斜面	古 墓
8	石ヶ森遺跡	自然堤防	縄 文	18	羽山古墳	丘陵斜面	古 墓
9	寒森山遺跡	冲積地	奈良・平安	19	通南遺跡	自然堤防	平安
10	立林古墳	丘陵斜面	古 墓	20	石堂山古墳	丘陵斜面	古 墓

第1図 寝鹿・契約壇遺跡と周辺遺跡 (S = 1 : 50,000)

## II 調査の経緯

### 1 調査に至るまでの経過

高畠町には、数多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）があり、縄文時代の起源にかかる日向洞窟をはじめ多くの洞窟や古墳が点在している。また、縄文時代草創期から歴史時代までの豊富な遺跡と景観から「まほろばの里」の名で広く知られている。

今回の発掘調査は、寝魔遺跡と契約塙遺跡の両地区に主要地方道高畠～川西線の道路改良事業が実施されることになり、山形県教育委員会では、昭和56年10月1日に遺跡詳細分布調査による現地確認調査を行ない、道路改良事業区内に両遺跡がかかるることを確認しました。そこで事業が策定した段階で、昭和58年10月21日に試掘調査を実施して、事業地区内にかかる両遺跡の保存状況や性格・内容さらに規模等の確認を行なった（山形県埋蔵文化財調査報告書 第94集 分布調査報告書 ⑫）。その内容に基づいて、昭和60年度に、山形県教育委員会・山形県土木部道路建設課・同米沢建設事務所・高畠町教育委員会等の関係機関による事前の協議を重ねた結果、山形県教育委員会が主体となって緊急発掘調査を実施し、遺跡の記録保存に資することとした。

### 2 寝魔遺跡の調査の方法と経過

遺跡は、南北約200m、東西250mの不定形で、面積は約3,600m<sup>2</sup>程となる。

調査範囲は、道路改良事業の敷地内約18～24m幅を対象にして、始めに出土遺物や住居跡などの遺構や遺物の発見地点を正確に記録および整理ができるように、調査対象区の全域に2×2mを一単位とするグリッド（方眼状の調査区）を設定し、座標Y軸方向はN-10°-Wを測る。

つぎに、調査地区のなかの遺構や遺物の集中地区や土層の堆積状態を知るため、2×5mの試掘溝を10～20mの間隔で東西や南北の方向に井桁状に入れて、粗操作業を行なった。試掘調査の結果、調査地区的層序は、西側では水田の耕作面より下の層は1.2～1.5mまでが砂層であり、遺物包含層は認められなかった。東側の畑地地区では、30～40cmまで旧水田や果樹耕作により全体的に搅乱を受けていたが、その中でも比較的良好に遺物包含層が残っている地区があることが確認できた。この結果に基づいて、精査地区を調査対象地区の東側に設けて、面積 約684m<sup>2</sup>について調査を進めていった。

表土粗削ぎ後、面整理作業を行ない、遺物出土状況の記録観察、遺構プランの確認、精査、掘り下げを順次行なった。最終的には、個々の遺構の実測・写真撮影・全体の実測を行ない、調査の全日程を終了した。

調査経過は次の通りである。調査は昭和61年5月12日～同年6月17日までの延26日間にわたって行なわれた。

5月12日 機材搬入、鍼入式、基準杭設定。

5月13日 坪掘りによる遺跡の状況把握。

5月16日 重機による調査区の拡張、面整理作業。

5月19日～29日 面整理、遺構プラン検出作業。

6月2日～5日 調査区東側部分の遺構精査、掘り下げ作業に入る。後半より、西側部分の土壌の掘り下げ作業を行なう。並行して検出遺構の実測図作成、レベリング、写真撮影を行なう。

6月6日～12日 調査区西側部分の遺構精査、掘り下げ作業に入る。並行して検出遺構、遺物出土状況等の実測図作成、レベリング、写真撮影を行なう。

6月13日 検出遺構の実測図作成、レベリング、写真撮影を行なう。調査区全体の実測、レベリング等の記録を行なう。

6月16・17日 各方向より完掘全景写真の撮影を行なう。並行して出土遺物の洗浄、整理を行なう。関係各機関への調査終了の連絡を行なう。

6月20日 現地説明会を催し、地元地区民、関係機関他、多数の市民の参加を得る。

### 3 契約地遺跡の調査の方法と経過

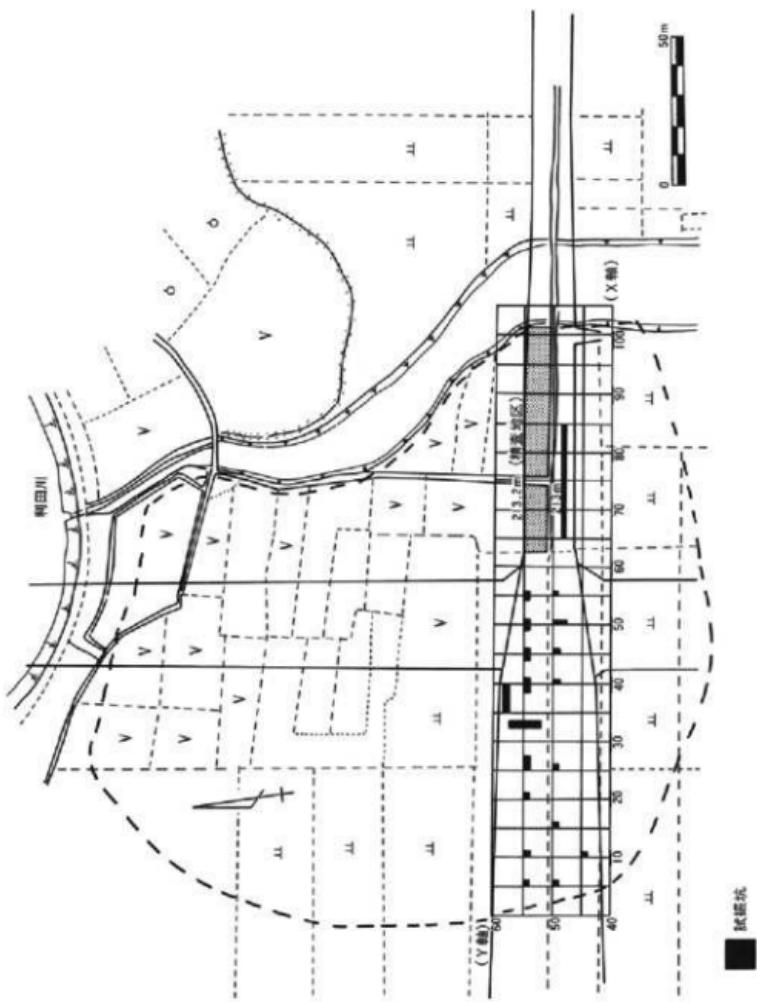
遺跡は、南北約80m、東西約160mの不定形で、面積は約2,850m<sup>2</sup>程となる。

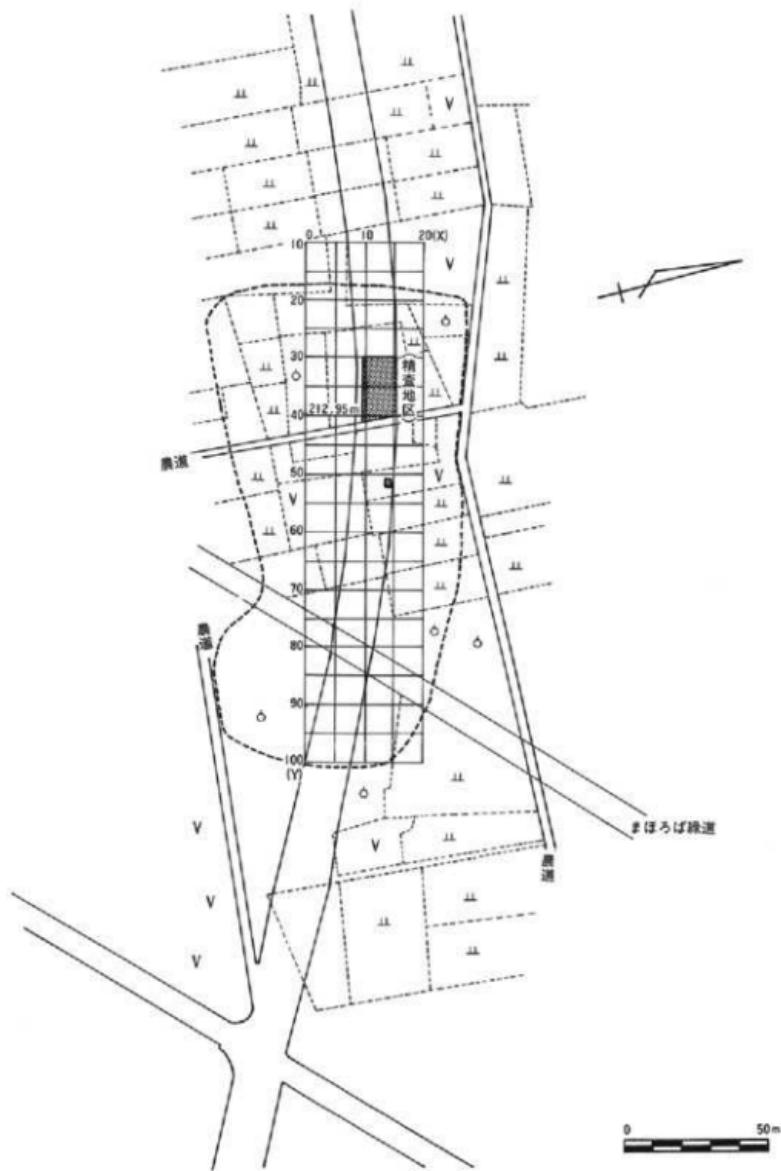
調査範囲は、道路改良事業の敷地内約18～34m幅を対象にして、始めに出土遺物や住居跡などの遺構や遺物の発見地点を正確に記録および整理ができるように、調査対象区の全域に2×2mを一単位とするグリッド（方眼状の調査区）を設定し、座標X軸方向はN-20°-Eを測る。

つぎに、遺跡詳細分布調査（山形県埋蔵文化財調査報告書 第94集 分布調査報告書(12)）の結果をもとに、調査対象地区的西側に精査地区（約336m<sup>2</sup>）を設け調査を進めていった。精査地区的調査の方法は、寝鹿遺跡と同じ方法をとった。

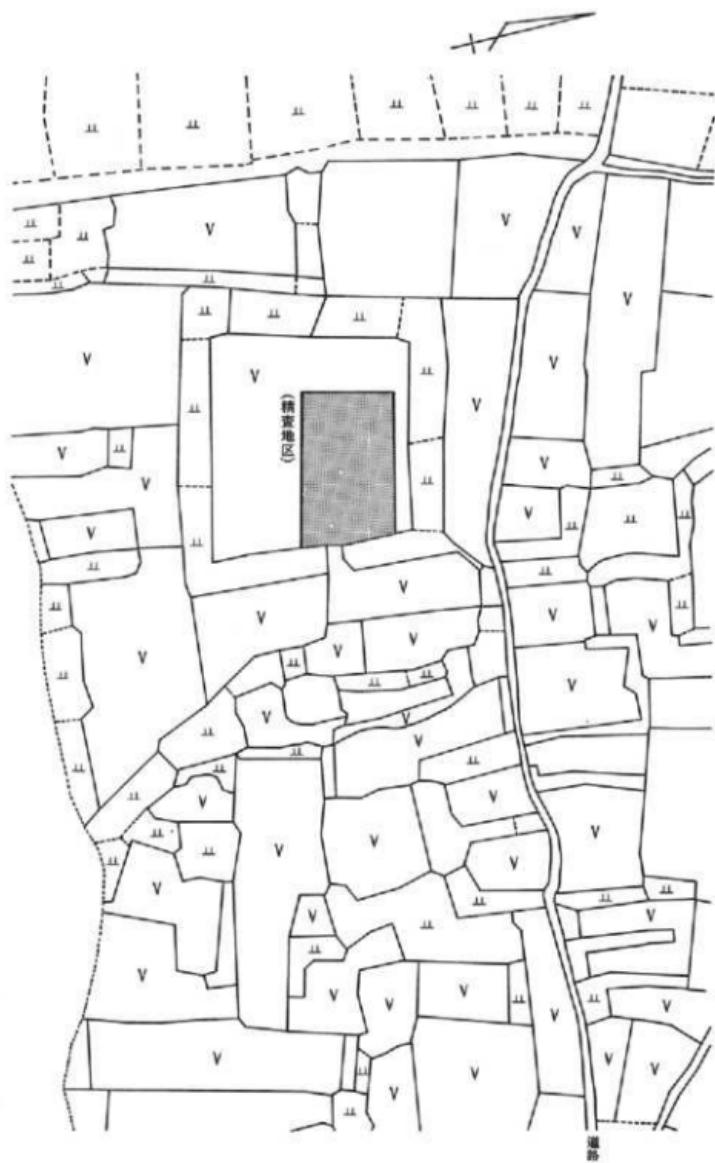
調査経過は次の通りである。調査は昭和61年6月16日～同年7月11日までの延16日間にわたって行なわれた。6月16日 重機による調査区の拡張を行なう。6月18・19日 面整理、基準杭設定。6月23日～7月3日 面整理、遺構プラン検出作業。7月3日 各関係機関を対象に現地説明会を催す。7月4日～10日 溝状遺構・柱穴の精査、掘り下げ作業、並行して検出遺構の実測図作成、レベリング、写真撮影を行なう。調査地区全体の実測図作成、レベリング、写真撮影を行なう。7月11日 遺物整理、関係各機関への調査終了の連絡を行なう、機材撤収。

第2図 遺跡全体図



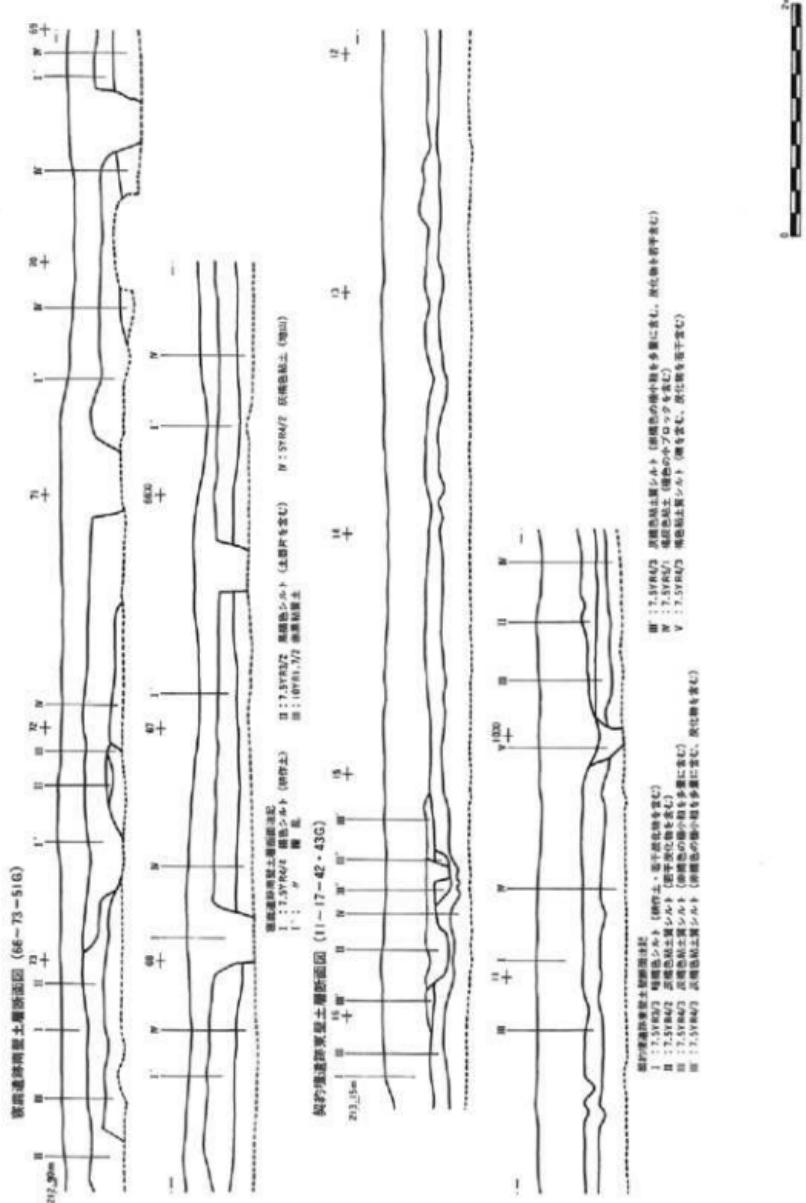


第3図 遺跡全体図



第4図 契約壇明治年間地籍図

第5図 豊鹿・美妙壇遺跡土層断面図



### III 寝鹿遺跡

#### I 遺跡の概観

本遺跡は前述通り和田川の左岸の自然堤防上に立地し、周辺の水田よりも一段高い微高地にある。層序は、遺跡西側で耕作土、砂層からなる。遺跡東側は、旧水田や果樹耕作により全体的に攪乱しているが、比較的良好に残っている地区から次のような層序を観察できた。

I 層 褐色シルト（耕作土） I'層 攪乱 II 層 黒褐色シルト（遺物包含層）  
III 層 赤黒粘質土（遺構確認面） IV 灰褐色粘土（第5図）

遺物の分布は、溝跡、土壙からまとまって出土している。特に調査地区西側の溝跡、土壙より多数出土している。

遺構の分布は、土壙8基、溝跡8基、柱穴50基、性格不明遺構2基が検出された。

土壙は調査地区的東側から多く検出されている。溝跡は調査区全体から検出されている。柱穴は調査地区中央部に集中している。大きさ、深さ、覆土はまちまちで建物跡にはならなかった。性格不明遺構は調査区西側より検出された。

#### 2 検出された遺構 a 土壙

##### (1) 2号土壙 (第9図)

精査地区西側にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径2.7m、短径2.1m、深さ60cmを測る。壁は上半が緩傾斜、下半が急傾斜の立ち上がりを呈する。底面は丸底である。遺物は、土器が多数出土した。

##### (2) 7号土壙 (第9図)

精査地区西側にあり、不整円形の平面プランを呈する。長径1.5m、短径1.3m、深さ10cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかに傾斜する。底面は平坦である。遺物は、数点出土した。

##### (3) 8号土壙 (第9図)

精査地区西側にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径1.4m、短径1.1m、深さ30cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は、数点出土した。

##### (4) 9号土壙 (第9図)

精査地区西側にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径1.3m、短径0.9m、深さ16cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかに傾斜する。底面は平坦である。遺物は、出土しなかった。

#### (5) 10号土壤 (第15図)

S X 11と重複しており、旧 S X 11→新 S K 10である。楕円形の平面プランを呈する。長径1.4m、短径1.3m、深さ20cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかに傾斜する。底面は平坦である。遺物は、2点出土した。

#### (6) 15号土壤 (第7・8図)

精査地区東側にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径4.5m、短径3.6m、深さ40cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかに傾斜する。底面は平坦である。中央部にピット1基検出されている。遺物は多数に出土した。特に中央部に重なるように出土する。

#### (7) 21号土壤 (第9図)

精査地区東側にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径1.4m、短径0.9m、深さ30cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかに傾斜する。底面は平坦である。

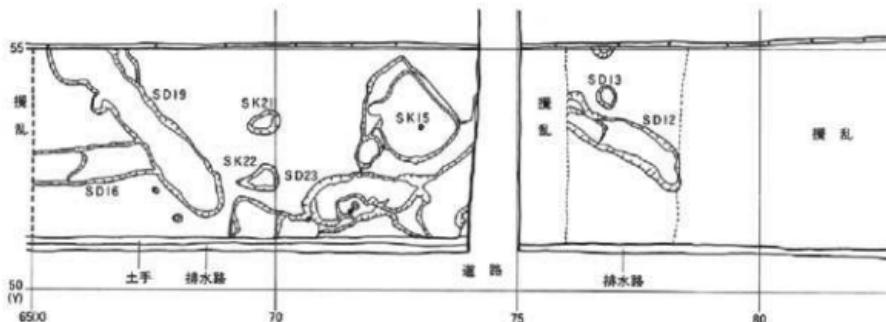
#### (8) 22号土壤 (第9図)

精査地区東側にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径1.7m、短径1.1m、深さ24cmを測る。21・22号とも遺物は出土しなかった。

### b 溝跡

#### (1) 3・4・5・6溝跡 (第13・14図)

精査区西側にあり、重複している。S D 4が古く、S D 3・5・6が新しい。S D 4は長さ7.2m、幅3.2m、深さ約24cmを測り、東西に延びている。S D 3は長さ4.8m、幅1.4m、深さ約20cmを測り、北西方向に直線状に延びている。S D 5は長さ2.4m、幅1.1m、深さ約10cmを測り、南方向に直線状に延びている。S D 6は長さ4.4m、幅2.4m、深さ約20cm



を測り、西側がSD4と重複する。各溝跡とも底面は平坦で、ゆるやかに傾斜する壁をもつ。

〈遺物〉 SD3では中央部からまとまって数点出土した。SD4からは散らばった状況で多量に出土した。SD5からは出土せず。SD6からは散らばった状況で出土する土器片が多い。4点まとまった形で中央部より出土した。

#### (2) 12号溝跡 (第10図)

調査地区中央部にあり、西側が攪乱をうけている。長さ50m、幅1.6m、深さ約30cmを測り、東西に延びる。西側が一段深くなっている。底面は平坦である。壁はゆるやかに傾斜している。

〈遺物〉 遺構全体から散らばった状況で出土していることから流れこみと考えられる。

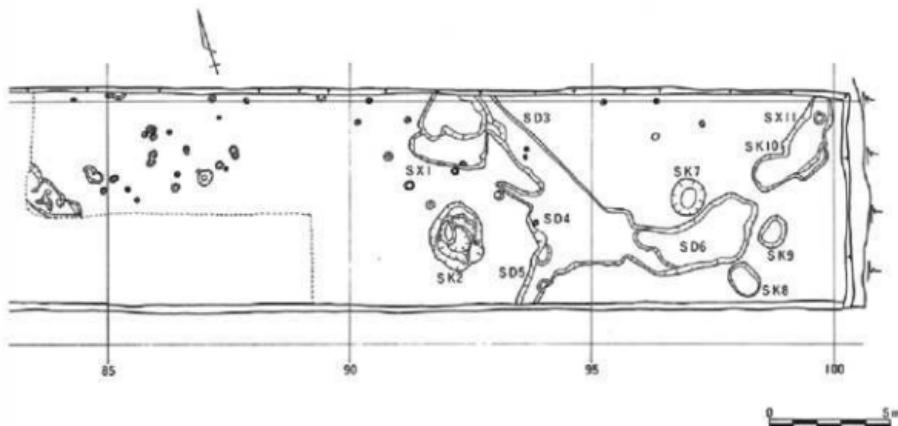
#### (3) 16・19号溝跡 (第10図)

調査地区西側にあり、SD16の東側がSD19と重複している。旧SD19→新SD16である。SD16は長さ4.8m、幅1.6m、深さ約20cmを測り、東西に直線状に延びる。西側は攪乱をうけている。SD19は長さ8.2m、幅1.8m、深さ約30cmを測り、北西・南東に直線状に延びる。各溝跡とも底面は平坦で、ゆるやかに傾斜する壁をもつ。

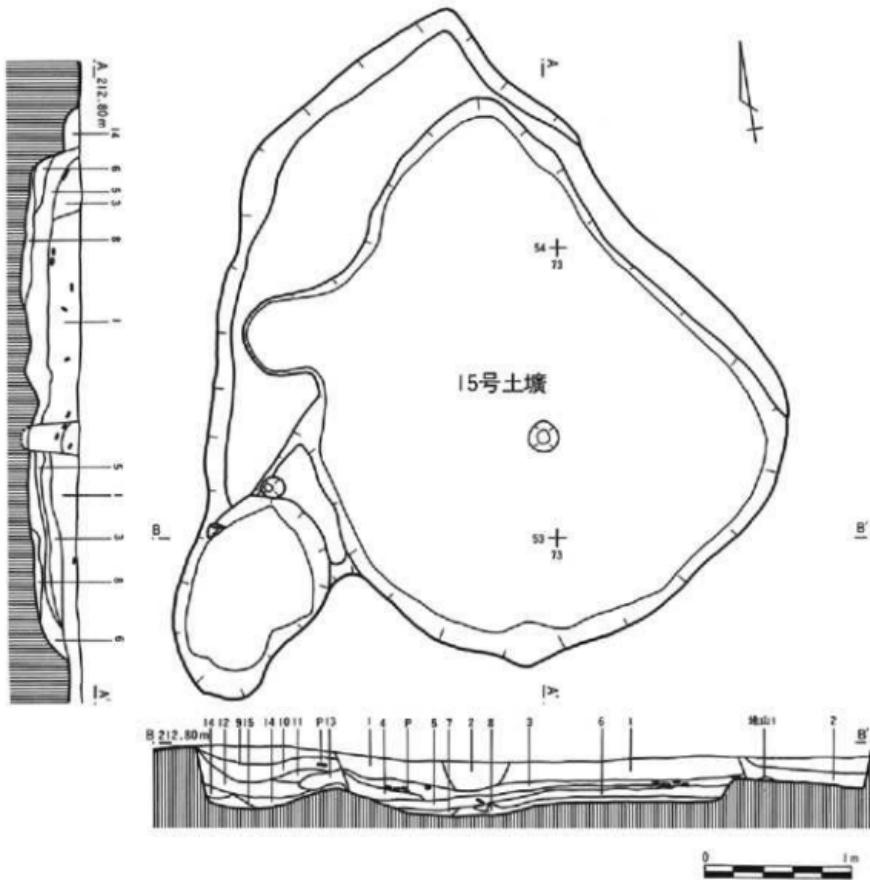
〈遺物〉 SD16では遺構全体より散らばった状況で出土していることから流れこみと考えられる。SD19では遺構北側から散らばった状況で出土している。また、石匙1点も出土していることから流れこみと考えられる、遺構南側から遺物は出土しなかった。

#### (4) 23号溝跡 (第11・12図)

調査地区西側、SD16・19、SK15の南側にあり、長さ9.5m、幅2.2m、深さ20~40cmを測り、東西に延びる。平面プランは他の溝跡と異なり蛇行している。底面は、遺構西部



第6図 遺構配置図

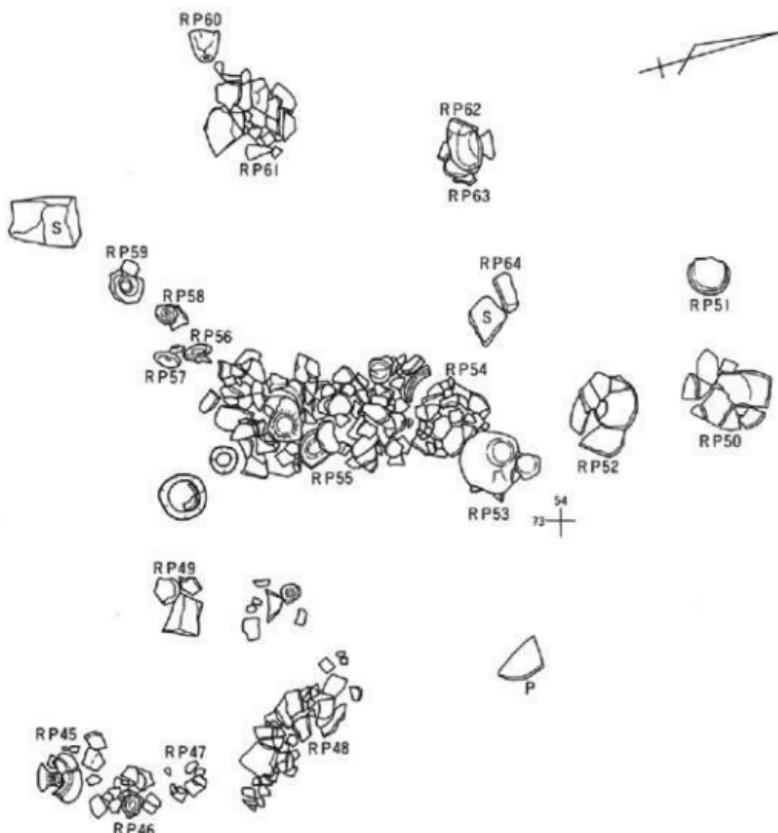


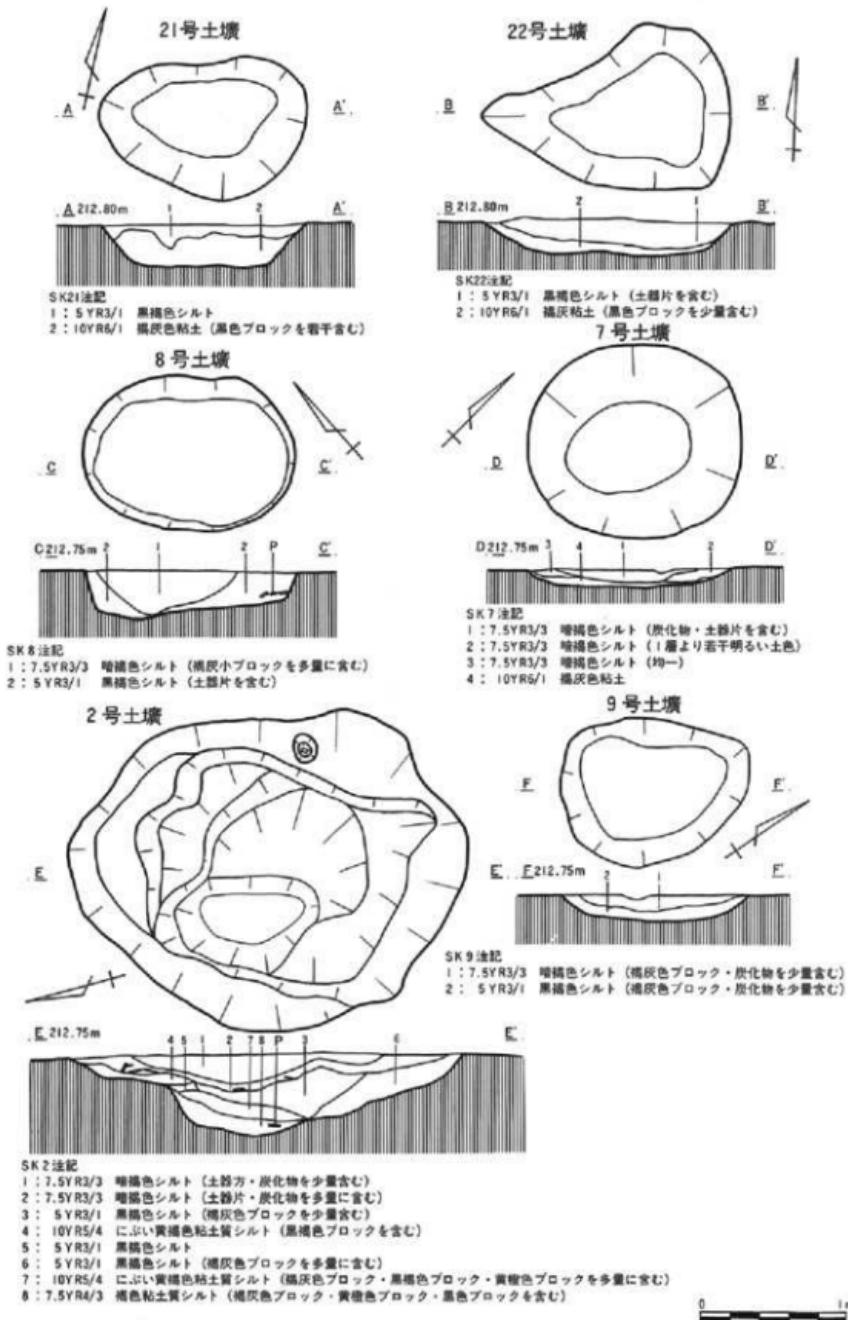
SK15注記

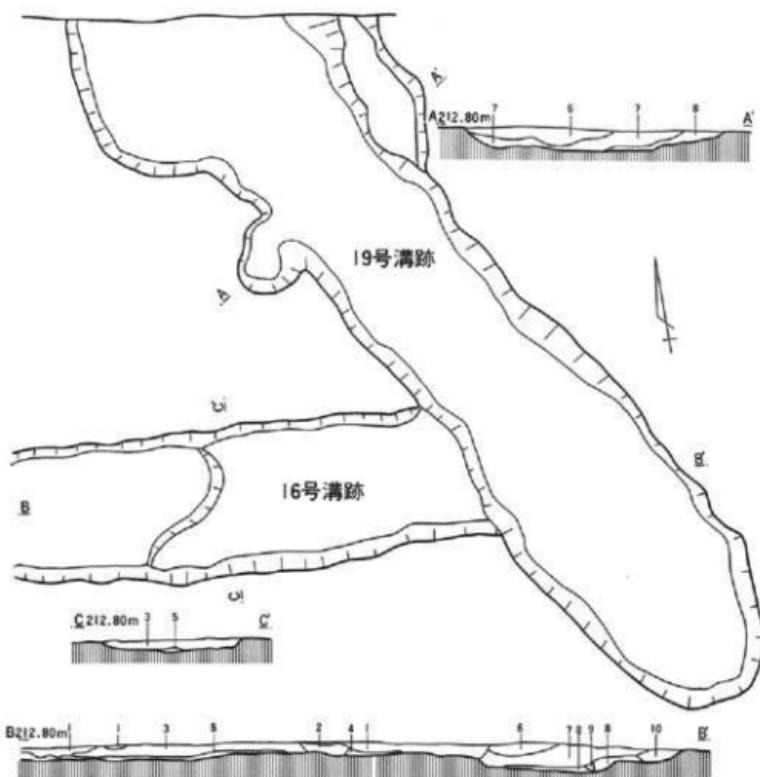
- 1 : IOYR6/4 に、ない黄褐色粘質土（炭化物・土器片を若干含む）
- 2 : IOYR7/6 粘質土（炭化粒子をまばらに含む）
- 3 : IOYR4/1 鳴色粘質土（土器片を多量に含む、炭化物を含む）
- 4 : IOYR7/6 明黄褐色粘質土（土器片・炭化物を含む）
- 5 : IOYR1.7/1 黒色シルト質（土器片を含む）
- 6 : IOYR5/2 灰青褐色粘質土（若干黄色粘土を含む）
- 7 : IOYR4/1 鳴灰色粘質土
- 8 : IOYR7/5 明鳴褐色シルト
- 9 : IOYR7/4 に、ない黄褐色粘質土（炭化物・土器片を多量に含む）
- 10 : IOYR7/4 に、ない黄褐色粘質土（黄色粘土ブロックを多量に含む）
- 11 : IOYR4/1 鳴灰色粘質土（炭化物を含む）
- 12 : IOYR4/1 鳴灰色粘質土（炭化物を多量に含む）
- 13 : IOYR7/6 明鳴褐色シルト（黄色粘土ブロックと12層が混ざっている）
- 14 : IOYR4/1 鳴灰色粘質土（若干の炭化物・黄色粘土ブロック混じり）
- 15 : IOYR7/6 明黄褐色シルト

53  
72 +

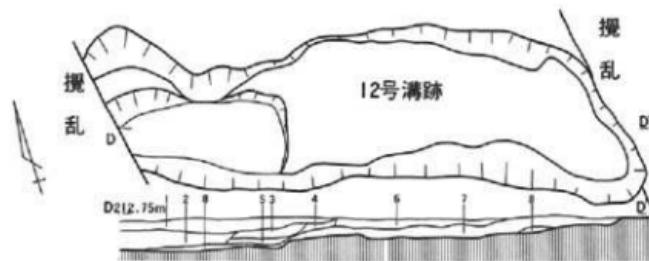
54  
72 +





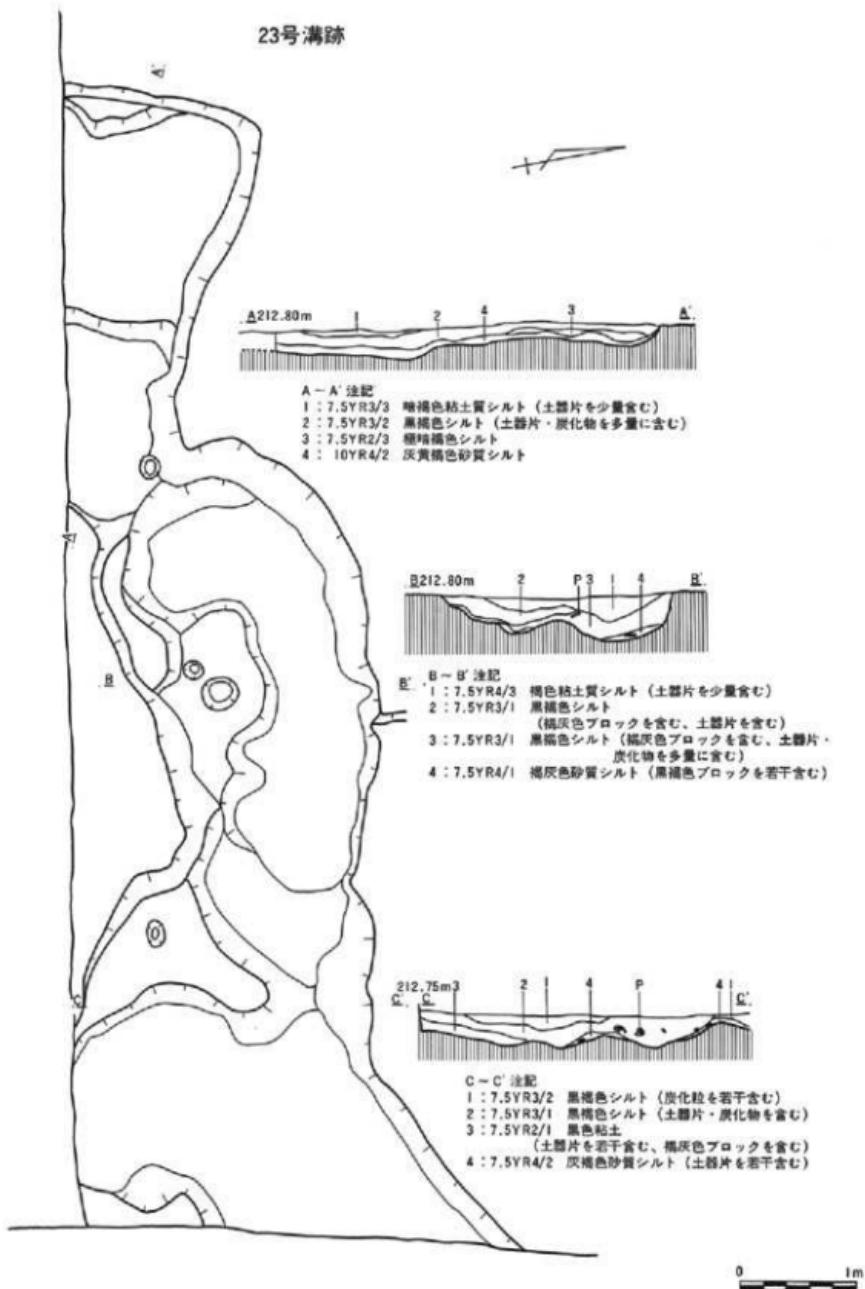


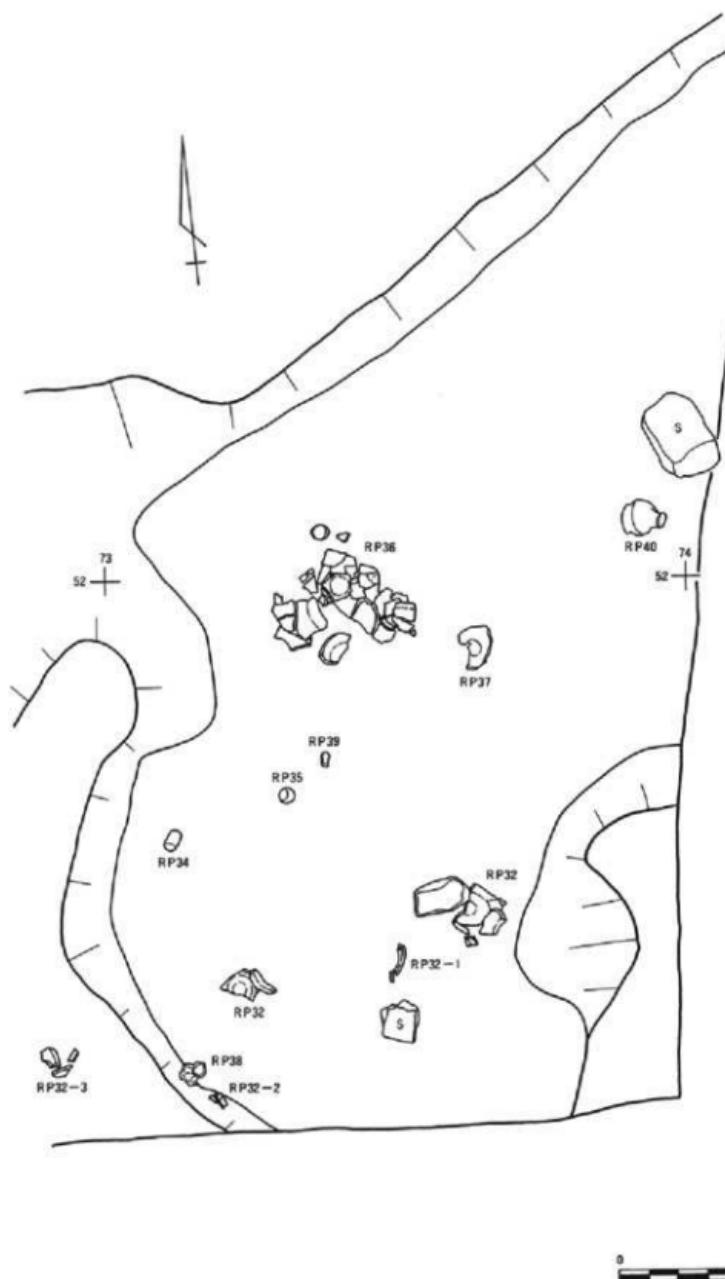
SD16・SD19注記  
 1 : 5 YR3/1 黒褐色シルト (褐色ブロックを含む)  
 2 : 5 YR3/1 黒褐色シルト (黄褐色ブロックを少量含む)  
 3 : 7.5YR3/3 緑褐色シルト  
 4 : 7.5YR3/3 増褐色シルト (黄褐色ブロックを若干含む)  
 5 : 10YR3/1 黑褐色シルト (黄褐色ブロックを若干含む)  
 6 : 7.5YR3/3 増褐色粘土質シルト (褐色ブロックを含む)  
 7 : 7.5YR3/2 黑褐色シルト (褐色ブロックを若干含む)  
 8 : 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト  
 9 : 7.5YR3/1 黑褐色シルト  
 10 : 7.5YR3/3 増褐色シルト (褐色ブロックを多量に含む)

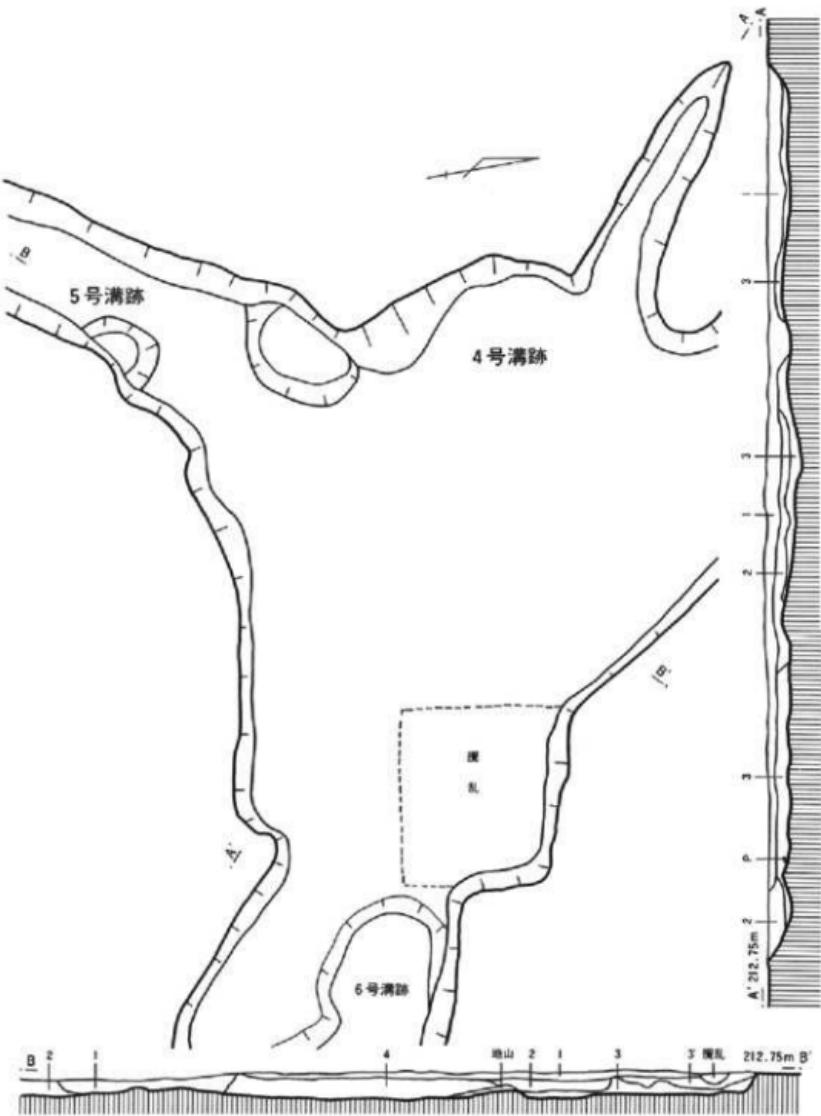


SD12注記  
 1 : 5 YR3/1 黒褐色シルト (土器片・炭化物を含む)  
 2 : 5 YR3/1 黒褐色シルト (土器片を含む、暗褐色小ブロックを少量含む)  
 3 : 5 YR3/1 黑褐色シルト (褐色ブロックを多量に含む、土器・炭化物を含む)  
 4 : 10YR6/1 灰褐色粘土 (褐色ブロックを多量に含む)  
 5 : 7.5YR3/3 増褐色粘土質シルト (褐色ブロックを含む)  
 6 : 7.5YR3/3 増褐色シルト (黄色ブロックを少量含む)  
 7 : 7.5YR3/1 黑褐色シルト (黄褐色ブロックを含む)  
 8 : 5 YR3/1 黑褐色シルト (褐色ブロックを少量含む)

23号溝跡



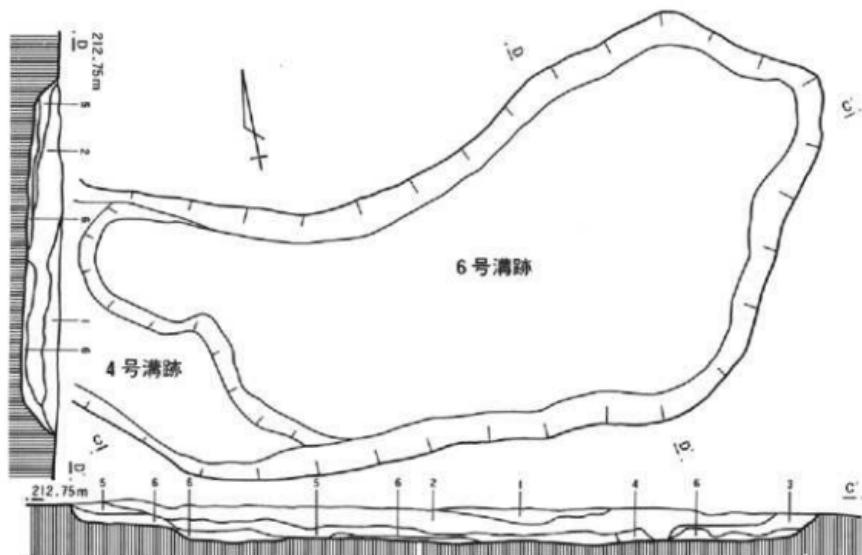
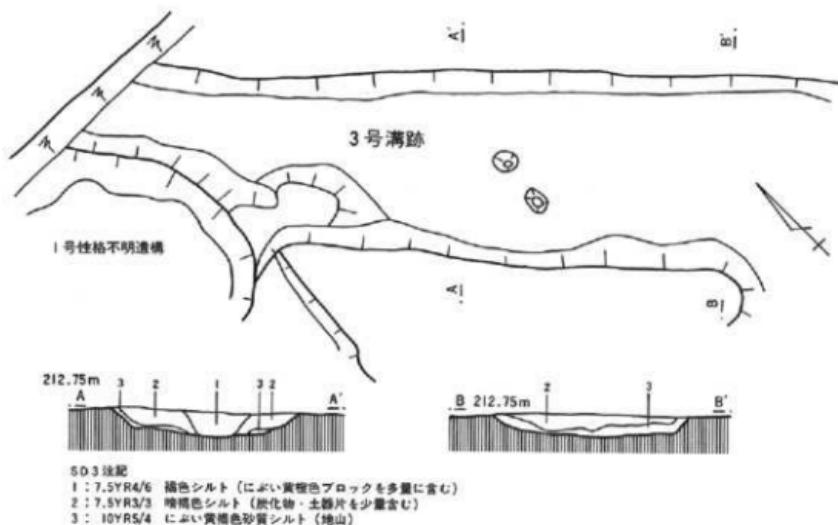




SD4・SD5法記

- 1 : 7.YR3/3 單褐色シルト（炭化物・土器片を含む。褐灰色ブロックを少量含む）
- 2 : 5.YR3/1 黒褐色シルト（褐灰色小ブロックを少量含む）
- 3 : 10YR5/4 に少い黄褐色粘土質シルト（褐灰色の小ブロック、黒色小ブロックを含む）
- 3' : 10YR5/4 に少い黄褐色粘土質シルト（褐灰色のブロックを多量に含む）
- 4 : 5.YR3/1 黑褐色シルト（褐灰色小ブロックを少量含む。黄褐色小ブロックを多量に含む）





SDG 指北

1:7.5YR3/3 噴褐色シルト（噴灰色小ブロックを少量含む）

2:7.5YR3/3 増粘色シルト(土器片・炭化物を含む、褐灰色の小プロックを多量に含む)

### 3.1 SYB3/1 高濃度シルト

4 : 7.SYR3/3 暗褐色シルト (褐色色ブロックを若干含む)

5 : 5YR3/1 黒褐色シルト (褐灰色ブロックを含む)  
6 : 10YR6/1 褐灰色粘土





SX I注記

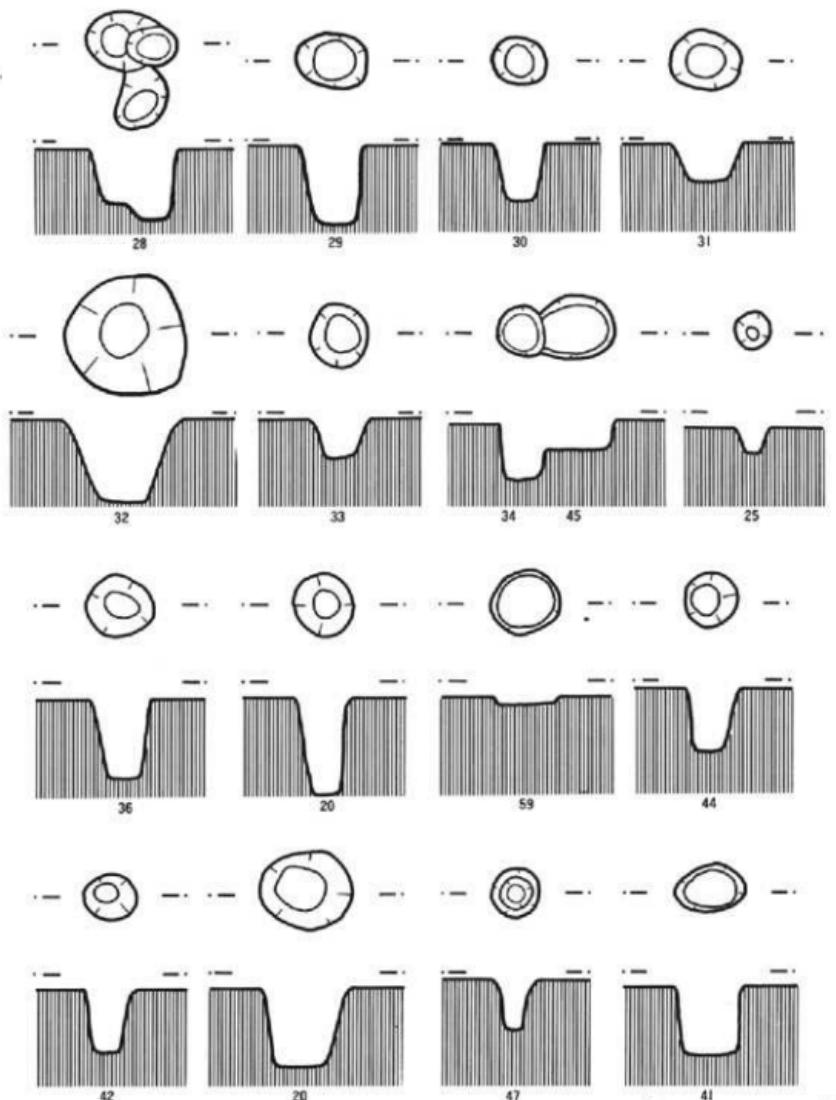
- 1 : 7.SYR4/6 棕褐色粘土質シルト（耕作土）
- 2 : 7.SYR4/3 棕褐色粘土質シルト（土器片・炭化物を少量含む）
- 3 : 7.SYR3/3 墓褐色シルト（土器片・炭化物を少量含む）
- 4 : 5.YR3/1 黑褐色シルト（にぼい黄褐色ブロックを少量含む、土器片を含む）
- 5 : 7.SYR3/1 黑褐色シルト（にぼい黄褐色ブロックを多量含む）
- 6 : 10YR5/1 にぼい黄褐色砂質シルト（地山）



SX II注記

- 1 : 7.SYR3/3 墓褐色シルト（炭化物・土器片を含む、黄褐色小ブロックを若干含む）
- 2 : 7.SYR3/3 墓褐色シルト（褐灰色のブロックを含む）
- 3 : 10YR6/1 深灰褐色粘土（黒色小ブロックを若干含む）
- 4 : 10YR6/1 深灰褐色粘土（土器片を含む）





水位レベルは212.75mを測る。

第16図 ピット集成図

(69・70-52G)が平坦、遺構中央部(70-73-52・53G)が丸底、遺構東部(73-52・53G)がゆるやかな丸底である。壁は、遺構西部ではゆるやかな傾斜である。遺構中央部北壁では西側がゆるやかな傾斜、東側が急傾斜である。南壁は、ゆるやかに傾斜し途中に平坦部をもつ、遺構東部ではゆるやかな傾斜をもつ。遺構内から4ヵ所自然の落ちこみを検出した。

〈遺物〉 西部からは散らばった状況で数点土器片が出土した。中央部からは縄文土器片1点を含み多量に出土した。東部からは須恵器1点、土製の支脚2点、小型土器3点を含む土器片が多量にまとまって出土した。

#### c ピット (第16図)

全体で50程検出された。大半が調査地区中央部にある。大きさ、形はすべて異なっている。また、検出面からの深さは5cm~40cmと種々である。掘り方だけでアタリは検出できなかった。覆土からA:褐色土を主体とし、炭化物を含む。B:黒褐色土を主体とし、若干の粘土ブロック、炭化物を含む。C:暗褐色土を主体とし、炭化粒、粘土ブロックを含む。D:黒色土を主体とし、炭化物を含む。に分類ができる。

〈遺物〉 SP32より土器片2点、SP35・36から土器片1点が出土した。3点とも磨滅が著しい。

#### d 性格不明遺構 (第15図)

##### (1) I号性格不明遺構

調査地区東側にあり、SD3と重複する。SD3との新旧関係は不明である。長径3.2m、短径2.8m、深さ15~30cmを測る。二段に掘りこまれている。土層観察から別々の時代に掘られて重複しているのではなく、最初から二段に掘りこんだものと考えられる。底面は両方とも平坦である。壁はゆるやかに傾斜する。

〈遺物〉 遺構北側、中央部底より土器片が多量に出土した。3層暗褐色シルト、4層黒褐色シルトが遺物包含層である。

##### (2) II号性格不明遺構 (第15図)

調査地区東側にあり、SK10と重複する。旧SK11→新SK10である。長径3.2m、短径1.6m、深さ約20cmを測る。遺構北側に径約50cmほどの性格不明の落ちこみをもつ。底面は平坦である。壁はゆるやかに傾斜する。覆土上部に礫を含む。

〈遺物〉 遺構南側、SK10と重複する近辺より重なる状況で3点ほど出土した。北側からは土器片数点が散らばって出土した。1・2層の暗褐色シルトが遺物包含層である。

### 3 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は、整理箱にして約35箱を数える。このうち土器が34箱、石製品が1箱である。大半は古墳時代の土師器であり、須恵器（壺1点）が出土している。その他縄文時代中期の土器片（大木9a式3点）と石匙（1点）、剣片がわずかである。

#### I 土 器

##### (I) 土師器 (第17~22図 表-1・2 図版7~14)

器種は大別して壺(A)・高壺(B)・壺(C)・甕(D)・櫃(E)に分けられる。

壺(A) 口縁・底部の形態より類別する。

A 1類 丸底で、やや丸味を呈する体部から口縁部が短く外反するもの。頸部のくびれには、稜を形成する。

A 2類 丸底で、丸く立ち上がる体部の中位前後から、口縁部が直立するもの。（第17図8・9）は明瞭にくびれて稜を有している。

A 3類 丸底で、A 2類よりさらに丸く立ち上がる体部を有し、体部の中位前後から口縁部が内脇後、外反する。そのため、体部との境に稜をもち、それに対応して内面に屈曲するくびれを呈する。

高壺(B) 壺部・脚部形態により分類する。（壺部はほぼA 3類に共通する）

B 1類 壺部は、緩やかに内脇して立ち上り、そのまま口縁部が外傾するもの。脚部は短く棒状となり、裾部は小さく広がる。

B 2類 壺部はB 1類と同様な器形を示す。脚部はやや短く、内面はやや深い山形の断面形態であり、裾部の先端がねあがっている。

B 3類 壺部は、体部に丸味を持たず、そのまま口縁部が大きく外傾するもの。脚部はやや短く、内面は深い山形の断面で、裾部の広がりをもたない。

B 4類 壺部は、丸味を呈する体部から口縁部が内脇し、外反する。脚部は短く、内面がやや深い山形を示し、裾部が大きく広がっている。

壺(C) 口縁部・体部・底部形態によって分類する。

C 1類 口縁部が外反し、頸部では直立する。頸部から体部上位で丸味をもっており、器形全体が球形状になっている。

C 2類 頸部が屈曲しており、口縁部では大きく外反している。

C 3類 小形の壺である。口縁部から頸部にかけてはやや外傾する程度で、体部の張らみが体部下半にある。

C 4類 底辺部から底部にかけての資料を一括する。底部は若干直立し、底辺部で丸味を

もって緩やかに立ち上る。

甕(D) 口縁・体部の形態によって分類する。

D 1 類 頸部が屈曲になり、口縁部が大きく外反する。(第20図4)は頸部がやや直立している。頸部から体部にかけてはやや丸味をもち胴長となっている。

D 2 類 体部は丸味を呈し立ち上り、口縁部は緩やかに外反し、最大径を示している。

D 3 類 底辺部資料である。C 4 類に類似しており、底部はほぼ直立し、底辺部で丸味を呈し立ち上がっている。

D 4 類 底辺部資料である。底部は平底を呈して、底辺部からやや外傾して緩やかに立ち上がっている。

甕(E) 口縁・体部形態で分類する。

E 1 類 体部は丸味を呈し立ち上り、口縁部は緩やかに外反している。底部は平底を示している。

E 2 類 口頸部がやや内凹し、体部上半がやや脹らみをもっている。底部はほぼ平底を呈している。

E 3 類 口頸部が大きく内凹を示しており、器形全体が丸味を呈している。底部は丸底となっている。

F 類 まり状の形態を呈している。器形は甕のE 3 類に類似しており、口頸部が内凹し底部も丸底を示している。

(2) 須恵器 (22図9 図版10 表-2)

今回の調査では須恵器は1点出土したのみである。环身で、口縁部は端部が若干丸味を呈し、内傾気味にやや外反して立ち上る。受部は断面が三角形を示している。底部は丸底で若干の調整を施している。

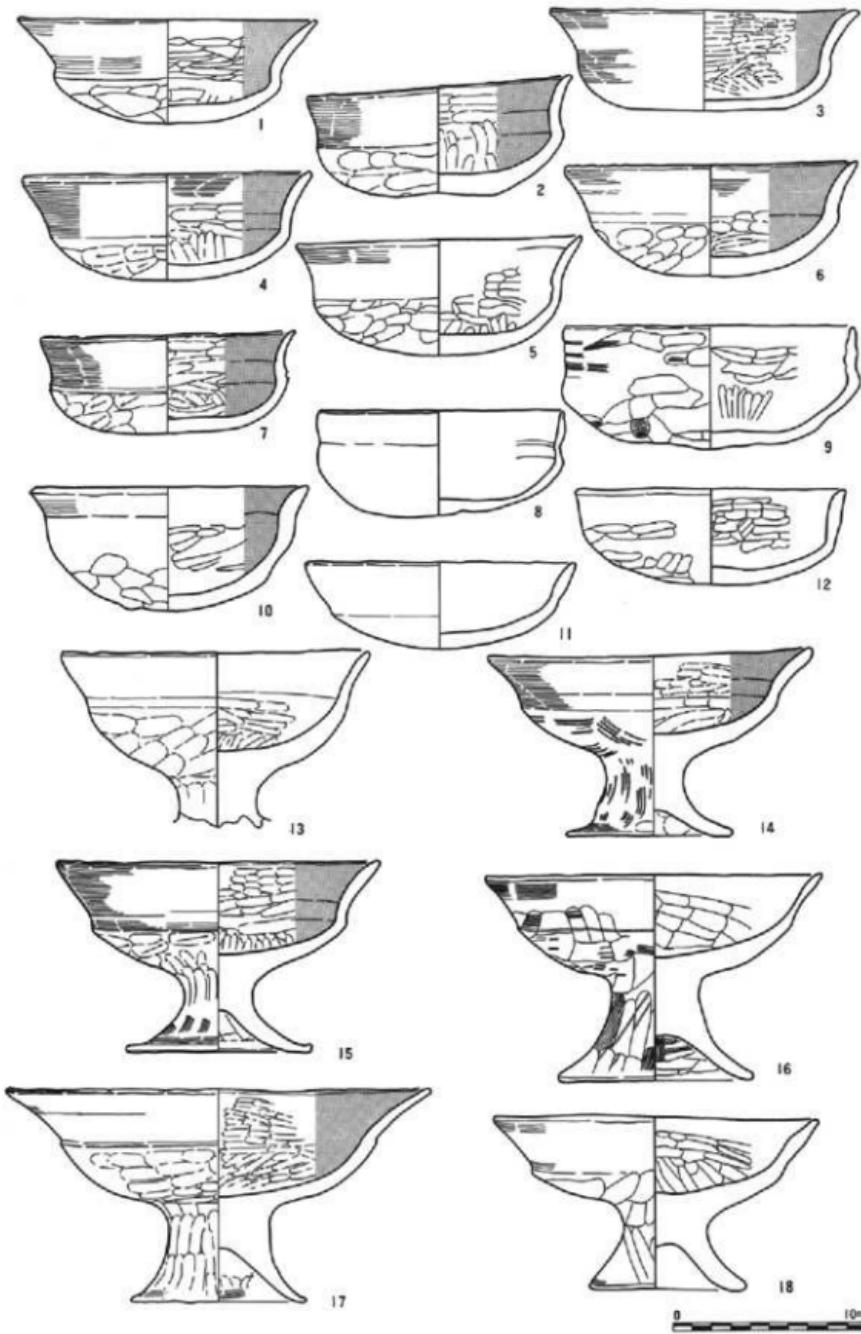
2 土製品・石製品 (第23図 図版10)

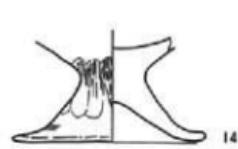
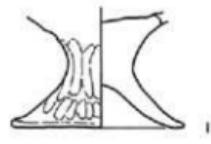
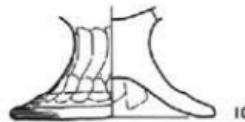
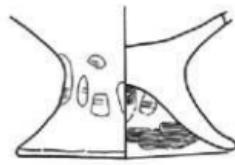
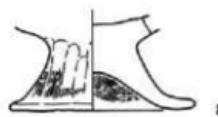
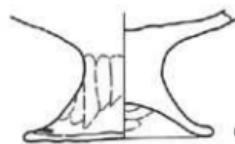
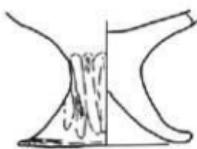
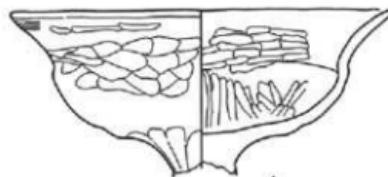
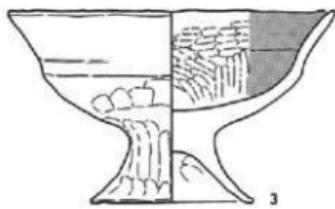
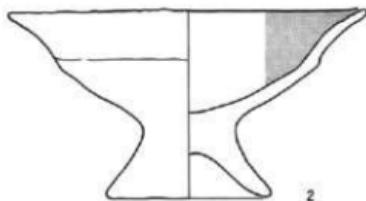
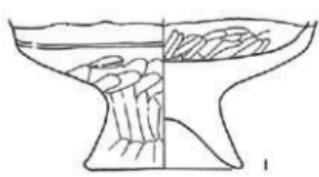
(1) 小形土器 (1~3) 手捏土器で、不整形を示すが土師器である。平底を呈する。底部が丸味をもって、口頸部が内凹する(1・2)、底部から直立する(3)がある。

(2) 土 玉 (4) 球形を呈し、径6~13mmの孔を両側から穿つ。

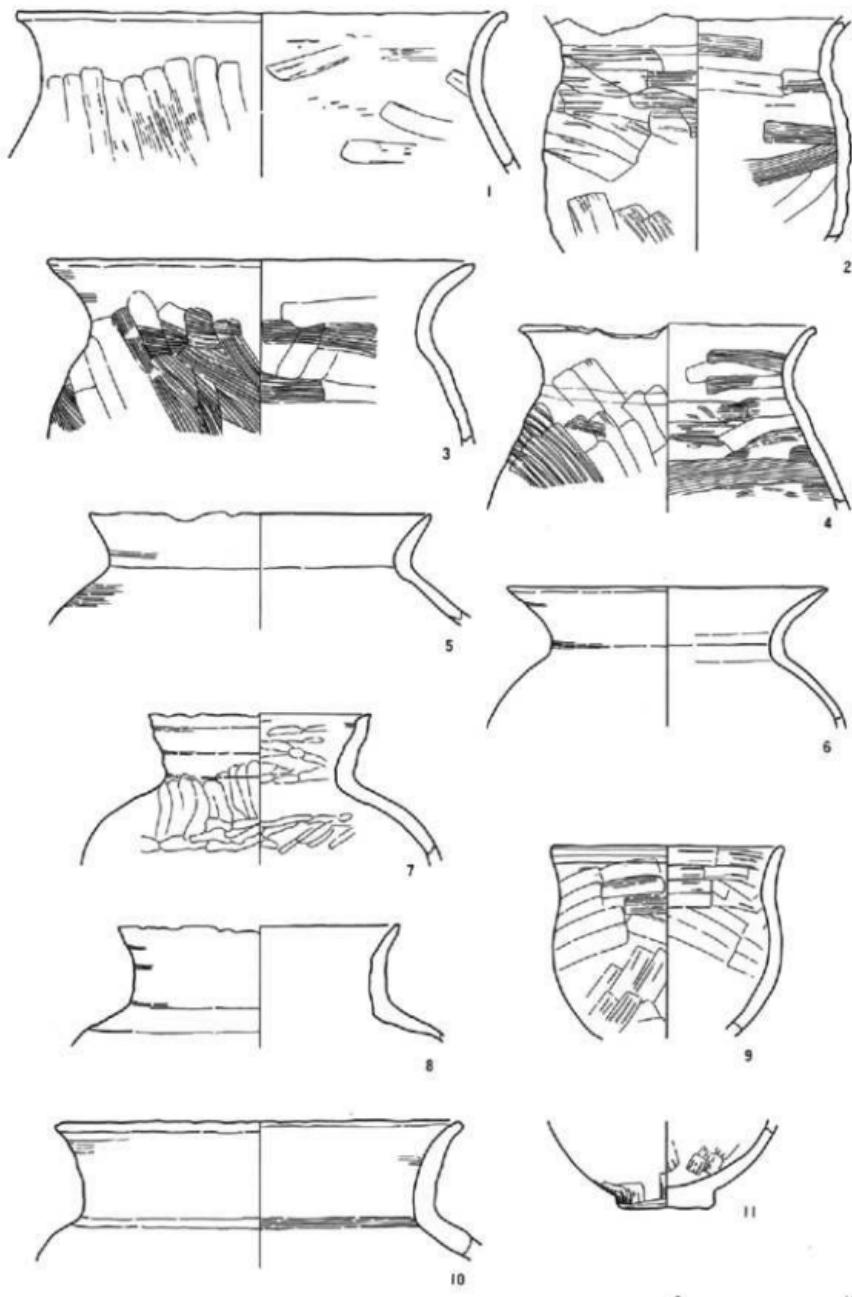
(3) 砥 石 (7・8) (7)は石皿状を示し中央部が窪んでおり、上面と側面の一部が磨面となる。(8)は角柱状の石材で、各面を使用している。

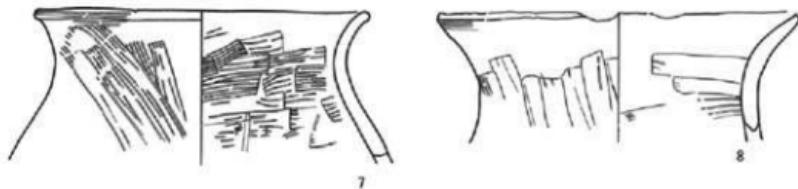
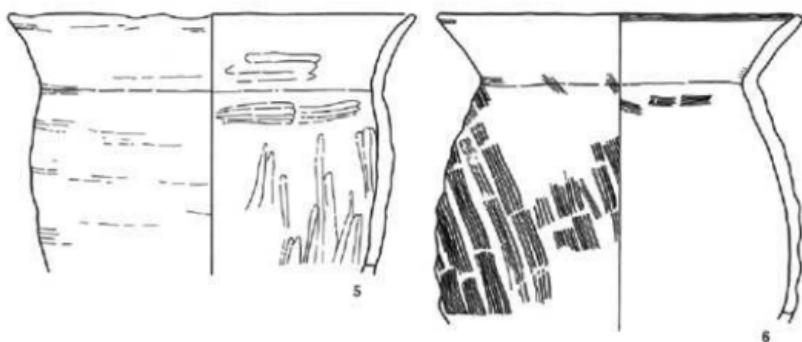
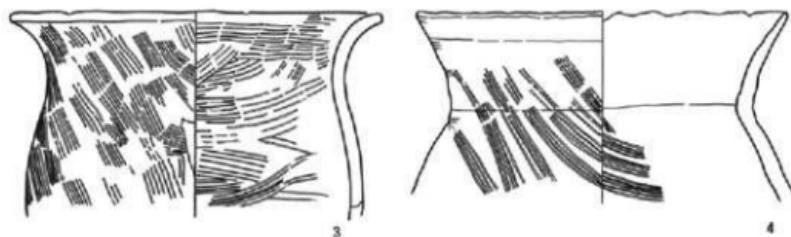
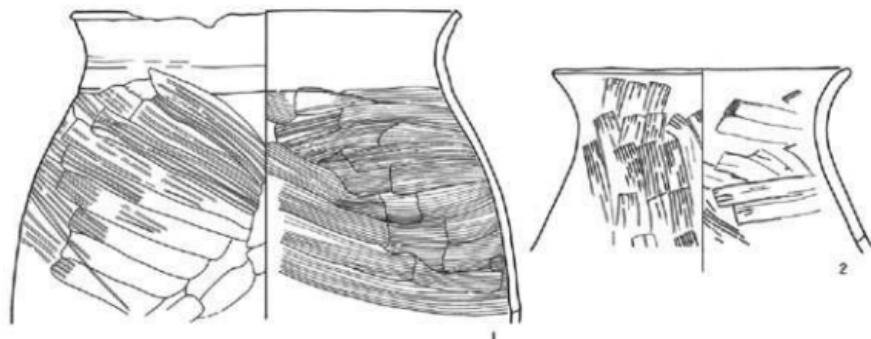
(4) 石 匙 (9) 半月形の形状を示す。横長の剥片を利用して、押圧剥離による両面加工を施している。縄文時代中期9a式期に相当する。



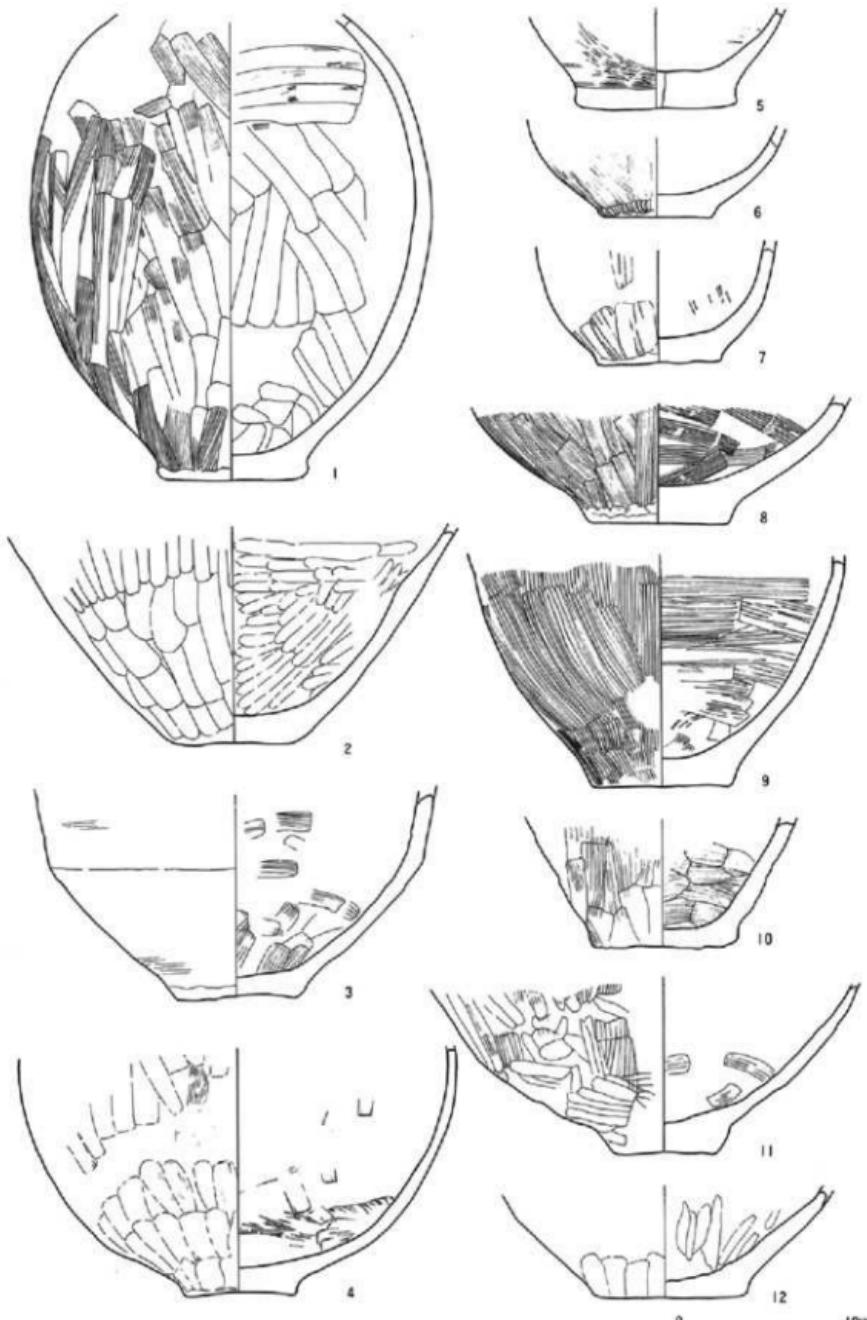


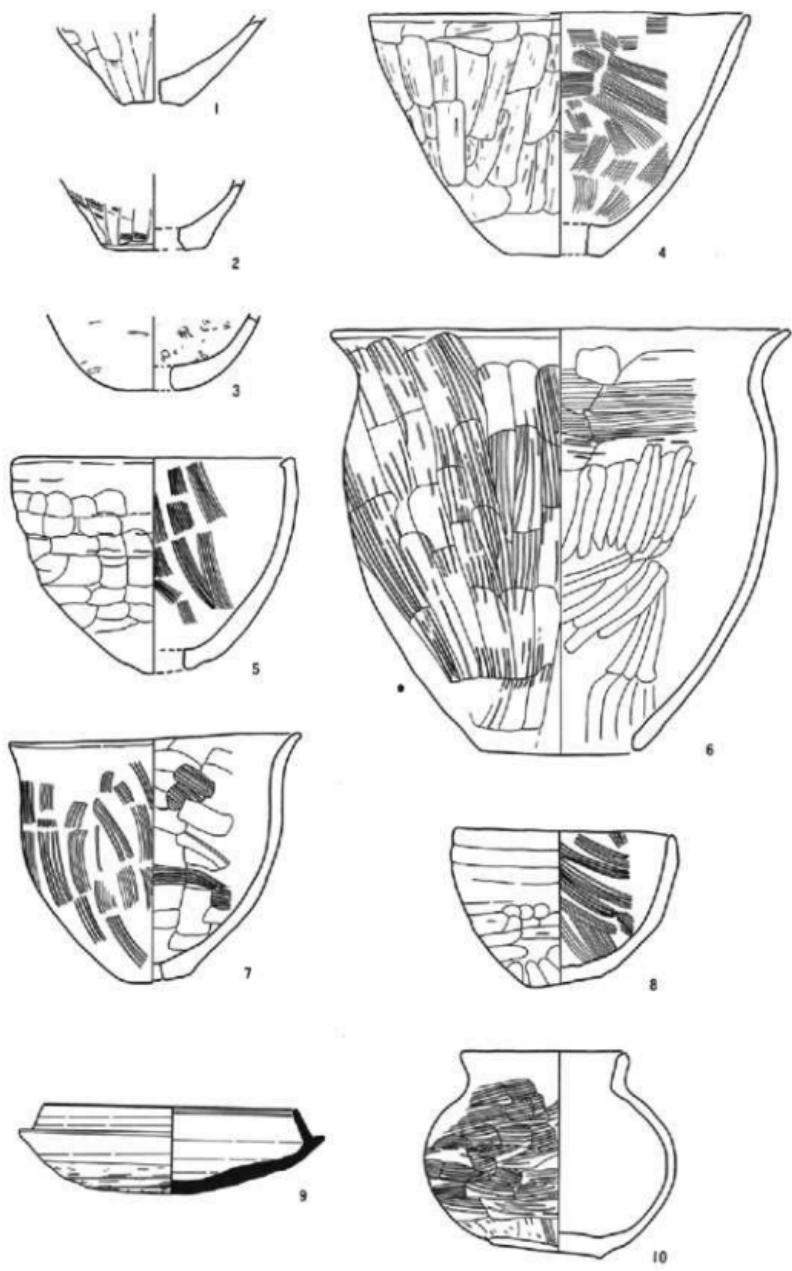
0 10cm



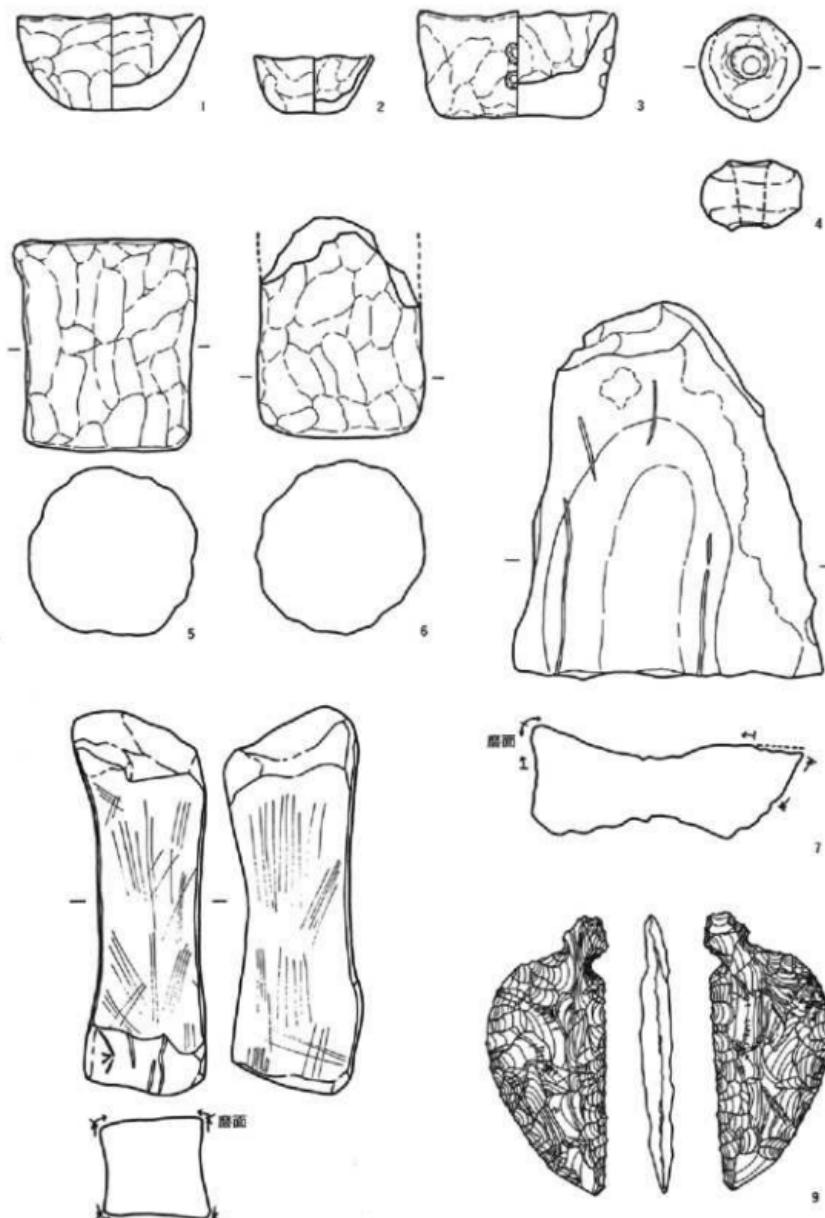


0 10cm





0 10cm



-31- 第23図 製品・石製品・石器実測図 (7)

0 10mm

表-I 土器觀察表

序 番 号	國版 番号	器種	出土遺構	法 量 (mm)		調 整		底部	分 類	備 考	
				口徑	底 徑	器 高	外 面				
17-1	7	杯	S K15	155		53	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	R P42 内黒
17-4	7	杯	S D23	150		51	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	R P28② 内黒
17-7	7	杯	S X11	132		50	ミガキ	ミガキ	丸底	A-1	R P19 内黒
17-10	7	杯	S K7	145		55	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	R P18 内黒土
17-11	7	杯	S K15	140		45	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	表面調整不明
17-8	7	杯	S K15	128		54.5	ミガキ	ミガキ	丸底	A-2	R P51 土器の表面がすべて削 れている。調整不明。
17-5	7	杯	S K15	148		60	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	
17-2	7	杯	S K10	138		58	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	R P20 内黒
17-6	7	杯	S D23	152		58	ミガキ	ミガキ	丸底	A-2	R P31 内黒
17-9	7	杯	S X1			ミガキ	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	R P 6
17-12	7	杯	S K15	140		55	ミガキ	ミガキ	丸底	A-2	
17-3	7	杯	S K15	160		51	ミガキ	ミガキ	丸底	A-3	内黒
17-13	8	高杯	S D23	160		(90)	ミガキ	ミガキ	B-4	R P40	
17-14	8	高杯	S K15	168	85	93	ミガキ	ミガキ	B-1	R P45 内黒	
17-15	8	高杯	S K15	167	95	97	ミガキ	ミガキ	B-2	内黒	
17-16	8	高杯	S K2	175	(100)	101	ミガキ	ミガキ	B-4	R P23	
17-17	8	高杯	S D6	220	90	109	ミガキ	ミガキ	B-4	内黒	
17-18	8	高杯	S K15	168	(80)	87.5	ミガキ	ミガキ	B-4	R P62	
18-3	8	高杯	S D23	170	85	98	ミガキ	ミガキ	B-4	R P29 内黒	
18-1	8	高杯	S K9	157	82	74	ミガキ	ミガキ	B-3	R P25	
18-4	8	高杯	S K15	197		84	ミガキ	ミガキ	B-4		
18-2	高杯	S K2	186	(85)	97	不明	不明	B-3	R P 4 内黒表面はく落		
18-17	8	高杯	S D23	(85)	49	ミガキ	ミガキ	B-1			
18-5	9	高杯	S K15	(90)	63	ミガキ	不明	B-4			
18-6	9	高杯	S K15	98	(66)	ミガキ	ミガキ	B-4			
18-7	9	高杯	S K15	95	(57)	ミガキ	ミガキ	B-4	内黒		
18-10	9	高杯	S K15	105	(57)	ミガキ	ミガキ	B-4	内黒		
18-8	9	高杯	S X1	95	(51)	ミガキ	ミガキ	B-4	R P24		
18-9	9	高杯	S D19	115	(73)	ミガキ	ミガキ	B-4	R P26		
18-13	9	高杯	S K15	85	(50)	ミガキ	ミガキ	B-2	R P56		
18-11	9	高杯	S K15	100	(51)	ミガキ	ミガキ	B-4			
18-12	9	高杯	S K15	90	(58)	ミガキ	不明	B-4	R P57		
18-14	9	高杯	S K15	100	(53.5)	ミガキ	ミガキ	B-4			
18-15	9	高杯	S K15	96	(47.5)	ミガキ	不明	B-4	R P63		
18-16	9	高杯	S K15	110	(43)	ミガキ	ミガキ	B-4	内黒		
21-1	12	盤	S X11	74	(240)	不明	不明	平底	?	R P21	
21-9	11	盤	S K15	70	(117)	ミガキ	ミガキ	平底	C-4	R P53	
19-11	12	盤	S D23	50	(43)	ミガキ	ミガキ	平底	C-4	R P29	
21-5	11	盤	S K15	85	(49)	ミガキ	ミガキ	平底	C-4		
21-7	11	盤	S K15	65	(61)	ミガキ	ミガキ	平底	C-3		
21-8	11	盤	S K15	75	(65)	ミガキ	ミガキ	平底	C-4	R P53	
22-10	14	盤	S K15	86	55	103.5	ミガキ	不明	平底	C-1	
19-9	10	盤	S K15	120	(95)	ミガキ	ミガキ	C-3			
19-6	10	盤	S K15	165	(69)	不明	不明	C-2	R P54		

神國 番号	国版 番号	器種	出土遺構	法量 (mm)			調 整		底部	分類	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面			
19-3	10	壺	S K15	221		(93)	ミガキ	ミガキ	C-2	R P55	
19-7	10	壺	S D23	115		(69)	ミガキ	ミガキ	C-1	R P33	
19-8		壺	S K15	145		(65.5)	不明	不明	C-1		
21-2	11	甕	S K15		70	(110)	ミガキ	ミガキ	D-4	R P53	
21-11	12	甕	S K15		50	(89)	ミガキ	ミガキ	平底	D-3	R P50
21-3	12	甕	S K15		64	(103.5)	ミガキ	ミガキ	平底	D-4	
21-10	11	甕	S K10		75	(63)	ミガキ	ミガキ	平底	D-4	R P22
21-12	11	甕	S D23		80	(55)	ミガキ	ミガキ	平底	D-3	R P37
21-4	11	甕	S K15		60	(128)	ミガキ	ミガキ	平底	D-3	R P52
19-1	11	甕	S D23	254		(85)	ミガキ	ミガキ	D-2	R P27	
19-2	10	甕	S D 3			(110)	ミガキ	ミガキ	D-2	R P 9	
19-4	10	甕	S D15	154		(92)	ミガキ	ミガキ	D-2		
21-5	11	甕	S K15		55	(50)	ミガキ	ミガキ	平底	D-3	R P55
20-1	11	甕	S X 1	202		(155)	ミガキ	ミガキ	D-2	R P24	
20-4	10	甕	S K15	193		(93)	ミガキ	ミガキ	D-1		
20-5	10	甕	S D23	210		(130)	ミガキ	ミガキ	D-1	R P36	
20-3	10	甕	S K15	195		(101)	ミガキ	ミガキ	D-2		
20-6	9	甕	S K 2	189		(162)	ミガキ	ミガキ	D-1	R P 2	
20-7	11	甕	S K15	173		(78)	ミガキ	ミガキ	D-2	R P61 内黒	
20-2		甕	S D 6	154		(91)	ミガキ	ミガキ	D-2	R P15	
20-8	10	甕	S K15	188		(60)	ミガキ	ミガキ	D-2	R P55	
22-8	14	甕	S X 1	118	40	79	ミガキ	ミガキ	F	R P10	
22-7	13	甕	S K15	157		125	ミガキ	ミガキ	E-1	R P60	
22-5	12	甕	S D 3	146		113	ミガキ	ミガキ	E-3	R P 5	
22-4	13	甕	S K15	196		125	ミガキ	ミガキ	E-2	R P54	
22-6	13	甕	S K 2	238		216.5	ミガキ	ミガキ	E-1	R P 3	
22-3	13	甕	S K15			(40)	ミガキ	ミガキ	E-3		
22-1	12	甕	S X 1		32	(43)	ミガキ	ミガキ	E-1	R P11	
22-2	12	甕	S D 6		54	(34)	ミガキ	ミガキ	E-2		
19-5	10	壺	S K15	117		(53)	不明	不明	C-2	R P55	
19-10	10	壺	S K15	210		(69)	不明	不明	C-1	R P47	

表-2 土器(須恵器)観察表

神國 番号	国版 番号	器種	出土遺構	法量 (mm)			調 整		底部	分類	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面			
22-9	14	甕	S D23	130		157	圓軸ヘラケズリ		丸底		R P32

## IV 契約壇遺跡

### I 遺跡の概観

本遺跡は前述通り和田川の左岸の自然堤防上に立地し、周辺の水田よりも一段高い微高地にある。標高は213mを測り、地目は、畠地・水田である。

昭和58年度の分布調査の結果、出土遺物はフレーク1点が出土したのみであった。しかし、遺跡西側の畠地において略方形を呈する区画が確認され、時期・性格等は不明ながら、辺の規格性等から人工的な構築物と推定された。

この結果をもとに、略方形を呈する区画内部(270m<sup>2</sup>)を調査地区とした。

調査地区から次のような層序を観察できた。

I層 暗褐色シルト（耕作土・若干の炭化物を含む） II層 灰褐色粘土質シルト（若干の炭化物を含む） III層 灰褐色粘土質シルト（赤褐色の極小粒を多量に含む） III'層 灰褐色粘土質シルト（赤褐色の極小粒を多量に含む、炭化物を含む） IV層 灰褐色粘土質シルト（赤褐色の極小粒を多量に含む、炭化物を若干含む） V層 褐灰色粘土（橙色の小ブロックを含む） VI層 褐色粘土質シルト（礫を含む、炭化物を若干含む）（第5図）

遺構の分布は、溝跡8基、柱穴110基ほどが検出された。

溝跡は調査地区東側から4基、中央から2基、西側より2基検出された。

柱穴は10~16~38~42Gと8~12~30~38Gより検出された。

### 2 検出された遺構 a 建物跡（第24図）

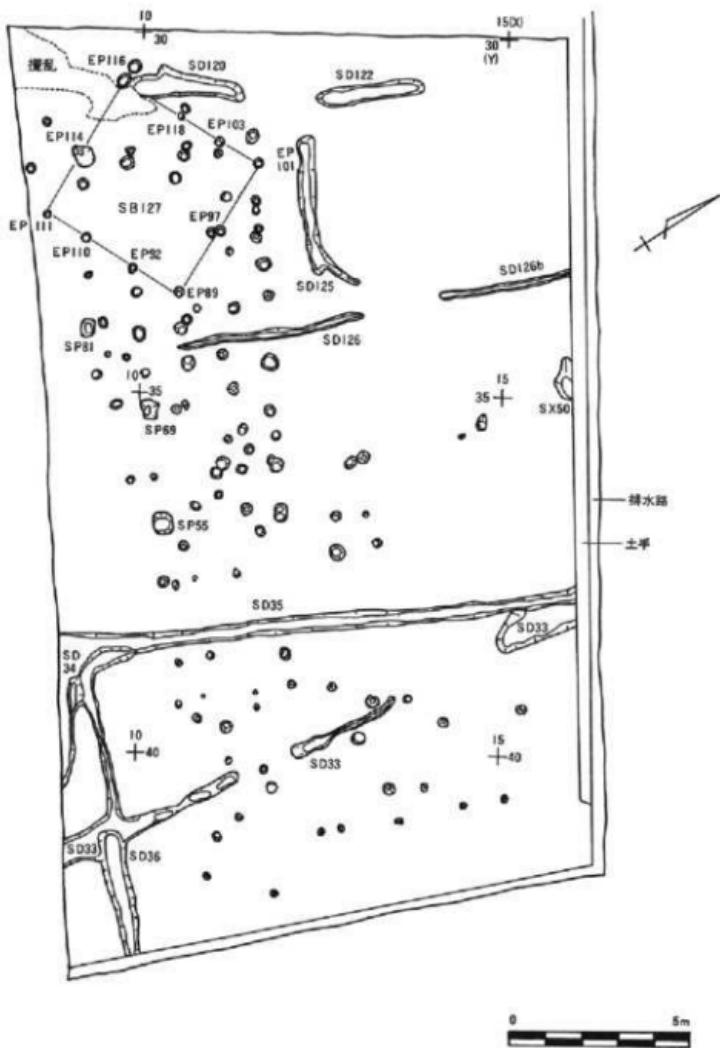
30~34~8~12Gに位置する。柱穴の配置等から2間×3間の掘立柱建物跡と思われる。柱間は、東側桁行で西から1.2・1.5・1.4m、西側桁行で1.8・1.3・1.2mを測る。梁行柱間は、南北面とも2.1mを測る。柱穴の覆土は、暗褐色シルトを主体としている。

### b 溝跡（第25図）

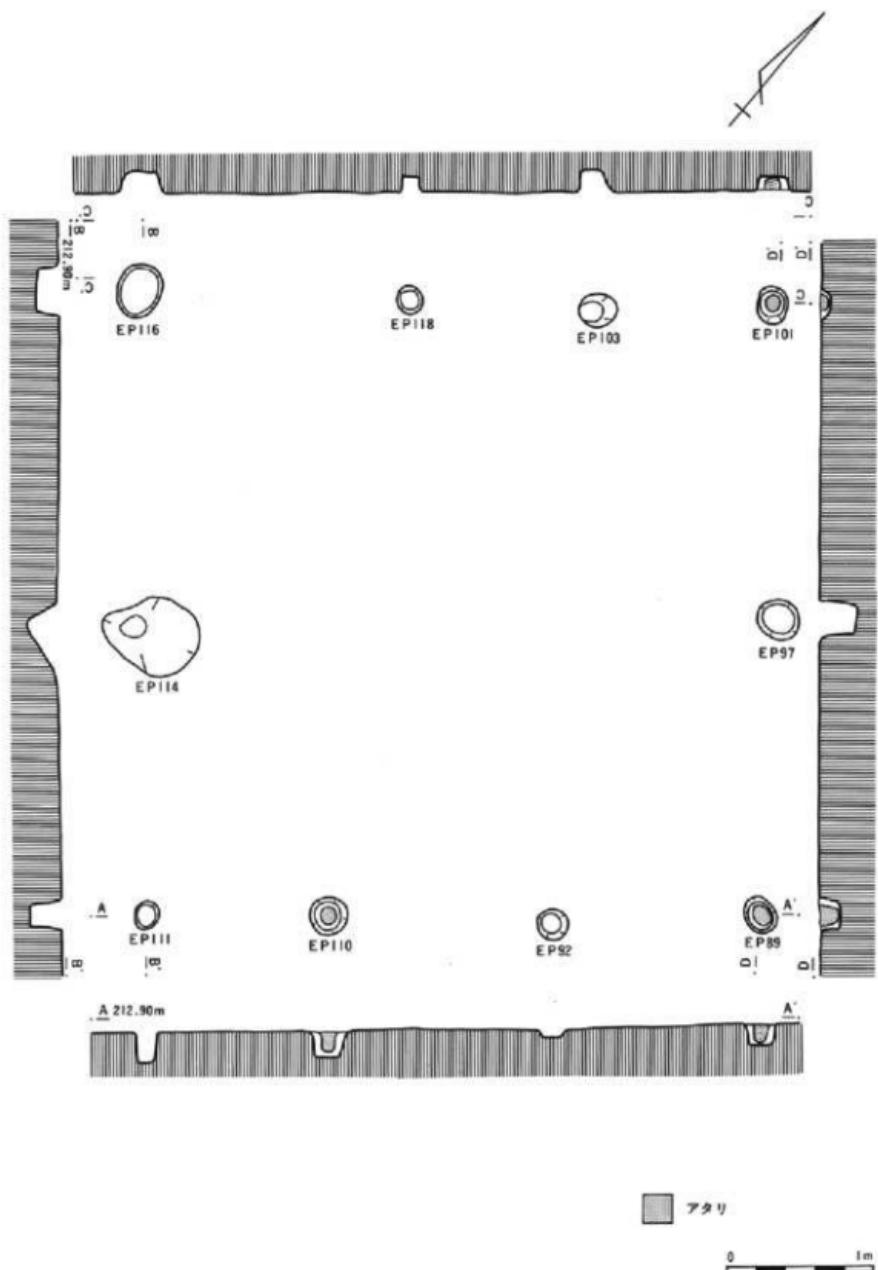
調査地区東側にS D33~36がある。各溝跡とも重複している。旧S D33→新S D35、旧S D33→新S D36、である。遺物は、S D34より石臼が1点出土した。他の溝跡から遺物は出土しなかった。S D33~36以外の溝跡は浅く深さ10cm以内で覆土は一層である。

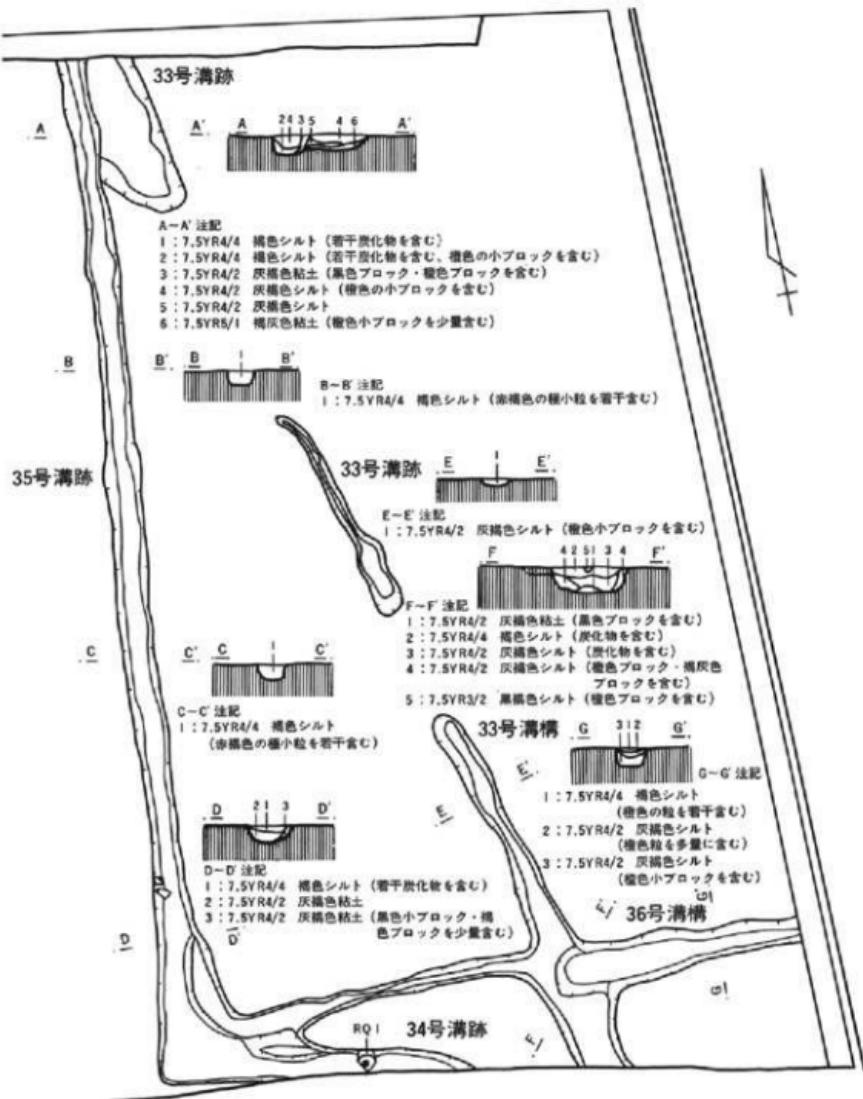
### c ピット（第26図）

覆土からA：褐色シルト主体のもの、B：暗褐色シルト主体のものに分類できる。掘り方またはアクリが僅10~20cm程のものが大半をしめる。柱列構成は不明である。



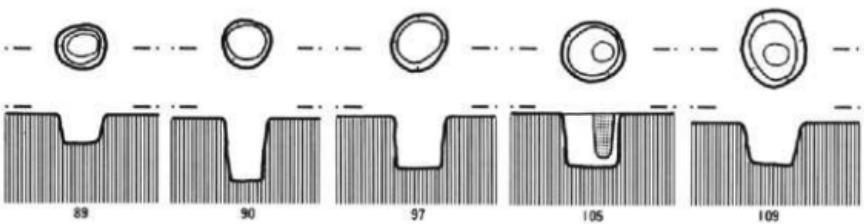
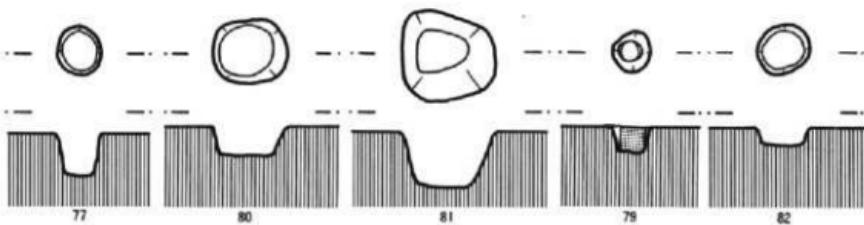
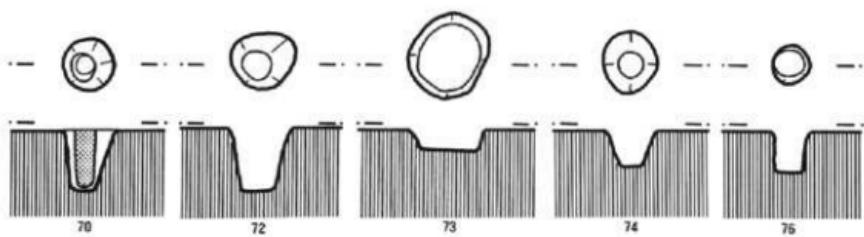
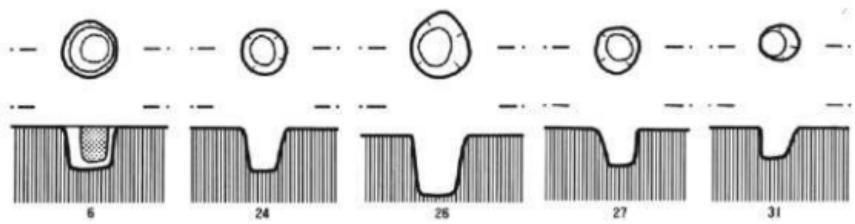
第24回 遺構配置図





水位レベル A-F・Gは212.98m。Eは212.91mを測る。





水位レベルは212.50mを測る。



第27図 ピット集成図

## V 調査のまとめ

### I 寝鹿遺跡

#### a 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代中期と古墳時代に分けられる。縄文時代の遺物は、土器3点・石匙1点・剣片3片のみであり、大半は古墳時代に属するものである。よって縄文時代の遺物についての詳細は省略することにする。

土器は、土師器・須恵器に分けられる。出土量は、須恵器1点を除き、土師器がほとんどである。これら土器の多くは、S X 1、S K15、S D23の覆土中層から底面にかけて、一括して廃棄された状態で出土している。

時期は、土師器では体部中位前後に稜を呈し外反する壺A 2・3類、高壺B 2・3類等から住社式に併行する一群と考えられる。但し、壺A 1類等にみられる体部からは縁部が短く外反するやや古い段階の土器も見受けられるが、S K15等との共伴関係から住社式の範囲に留めておくこととする。須恵器は、形態の特徴を基に陶邑編年に併行させると、II型式中段階併行期の6世紀中葉の時期と考えられる。今回の本遺跡の年代については、土師器・須恵器の類別から検討すれば、6世紀中葉～6世紀後葉という段階に比定される。

#### b 遺構について

今回の調査で検出された遺構のうち、明確にその性格が判明するものは、土壙8基、溝跡8基である。

土壙は、浅く小さなものが大半をしめた。S K10はS K11と重複し、旧S X11→新S K10が土層観察から考えられる。S K2は、検出された土壙の中で最も深い。遺物は覆土上部より多く出土していることから流れ込みと考えられる。S K15は本遺跡で最も大量に遺物が出土した遺構である。壺A 2・3類が多量に出土していることからS K15は6世紀中葉～6世紀後葉の所産と考えられる。

溝跡は、東西方向に延びるものと南北方向に延びる2タイプからなる。S D3・5・6・16・19は各々幅、深さ、壁の傾斜ともほとんど一定である。S D23は、平面プラン、深さ、壁の傾斜とも一定でない。須恵器と土師器壺A 2・3類が出土していることから6世紀中葉～6世紀後葉の所産と考えられる。他の土壙については年代・性格等は不明である。

他にピット、性格不明の遺構が多数検出されたが、住居跡は検出されなかった。本遺跡の性格については、住居跡が未発見であり、また土壙出土遺物の内にも後世の流れ込みと思われるものがあるため、最終的な結論を保留したい。

## 2 契約壇遺跡

今回の調査では、溝跡8基、柱穴110基、建物跡1棟が検出された。

建物跡は2間×3間で桁行・梁行ともに4.2mで正方形を呈す。

調査地区西側にあるSD120・122、中央にあるSD126・126bは深さ10cm以下の溝で1層からなり、南北に延びる。SD125とSD125・126bが同じ覆土であることから、同時期の所産の可能性がある。調査地区東側にあるSD35は南北に延び、幅20cm、深さ20~25cmを測る。遺物は出土していない。SD36は東西に延び、幅30cm、深さ30cm前後を測る。遺物は出土していない。SD34はSD33南側と重複する。新旧関係は明確にできなかった。石臼が1点出土したが明確な時代は不明である。

ピットは8~12~30~38Gに集中している。掘り方だけのピットが大半をしめるが一部にアクリガ残っているものも認められた。ピットの大きさ、深さ、覆土の観察の記録を整理検討した結果、掘立柱建物跡1棟の柱列構成が明らかとなった。SP55・66より土師器が各1点出土した。他の柱穴からの遺物の出土はない。

本遺跡は遺物が少ないうえに、出土遺物の時期差があるため、明確な時代は不明である。

### 〈参考文献〉

- 名和達朗他 『頬正塙遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第81集  
山形県教育委員会 1984年
- 安部 実他 『にひやく寺遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第92集  
山形県教育委員会 1985年
- 名和達朗他 『分布調査報告書(12)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第94集  
山形県教育委員会 1985年
- 阿部明彦他 『手藏田遺跡発掘調査報告書(2)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第98集  
山形県教育委員会 1986年
- 名和達朗他 『西沼田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第101集  
山形県教育委員会 1986年

図 版

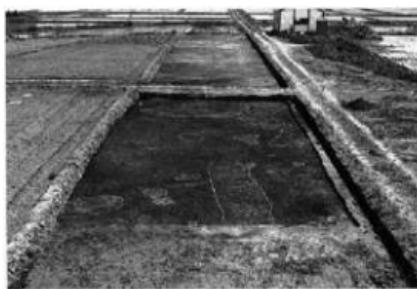




遺跡遠景（西から）



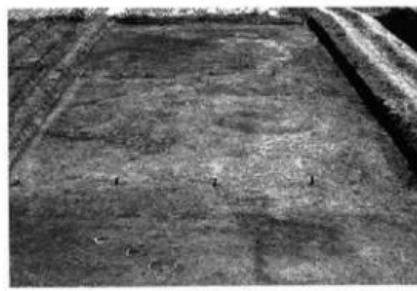
遺跡近景（東から）



西部遺構検出状況（西から）



中央部遺構検出状況（東から）



東部遺構検出状況（西から）

図版2 寝庭遺跡



西部遺構完掘状況（南東から）



S D16・I9全景（西から）



S D23・S K15全景（南東から）



S K15遺物出土状況（北から）

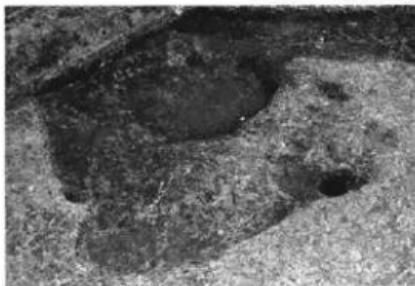


S K15遺物出土状況（西から）

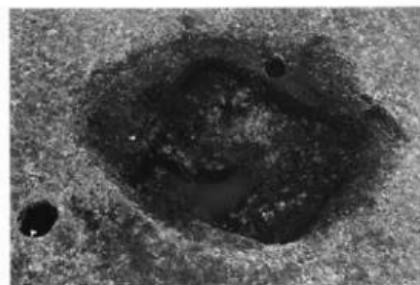
図版3 寝庭遺跡



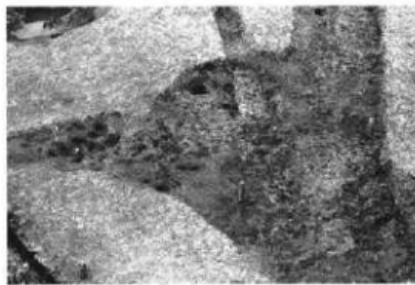
東部遺構完掘状況（西から）



S X I 全景（南から）



S K 2 全景（西から）



S D 4・5 全景（東から）



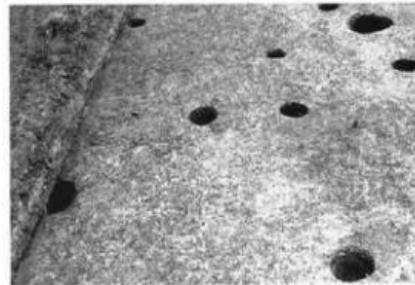
S D 6 全景（南から）



S K 10・S XII 全景（南から）



S D 12 全景（南から）

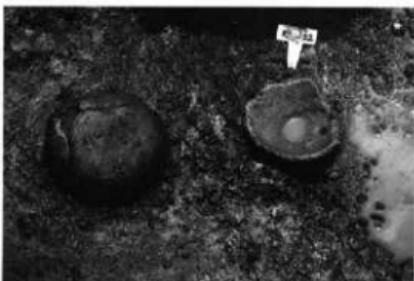


ピット群（西から）

図版 4 寝鹿遺跡



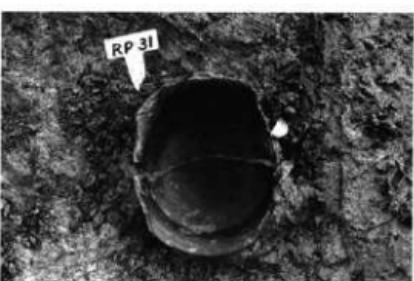
S D 6 遺物出土状況（北から）



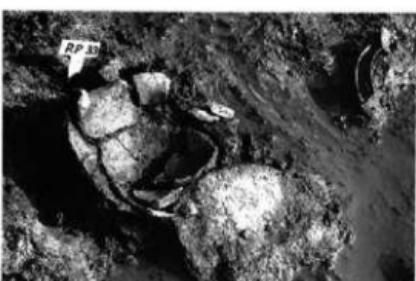
S XII 遺物出土状況（北から）



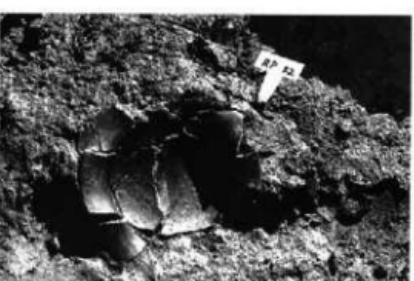
S D 23 遺物出土状況（南東より）



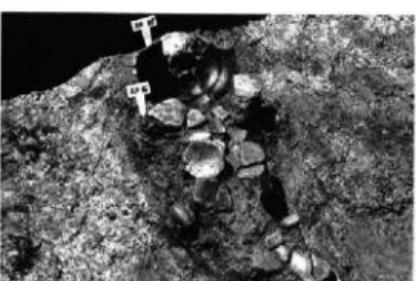
S D 23 遺物出土状況（北から）



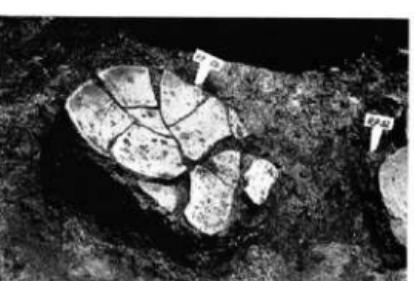
S D 23 遺物出土状況（東より）



S K 15 遺物出土状況（東から）



S K 15 遺物出土状況（北から）



S K 15 遺物出土状況（西から）

図版5 寝鹿遺跡



SK 2遺物出土状況（西から）



SX II遺物出土状況（北より）



SK 3遺物出土状況（西から）



SD 23遺物出土状況（北から）



SK 15遺物出土状況（西から）



SX 15遺物出土状況（西から）



SK 15遺物出土状況（北から）



SX 15遺物出土状況（西から）

図版 6 賽鹿遺跡



S K 15遺物出土状況（西から）



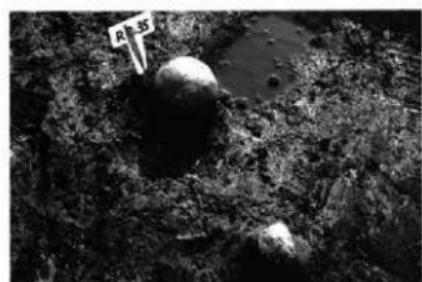
S K 15遺物出土状況（北から）



S D 23遺物出土状況（北東から）



S D 23遺物出土状況（東から）



S D 23遺物出土状況（東から）



S D 19遺物出土状況（東から）



S K 15遺物出土状況（北から）



S D 19遺物出土状況（東から）



17-1



17-4



17-7



17-10



17-11



17-8



17-5



17-2



17-6



17-9



17-12



17-3

図版 8 寝鹿遺跡



17-13



17-18



17-14



18-3



17-15



18-1



17-16



18-4



17-17



18-17



18-5



18-6

18-7

18-10



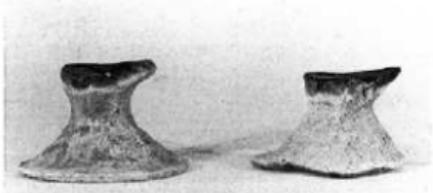
18-8



18-9

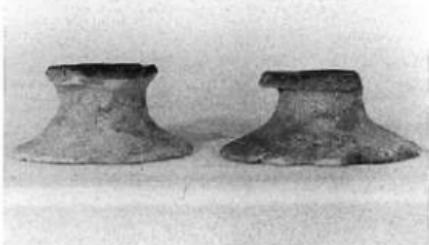
18-13

18-11



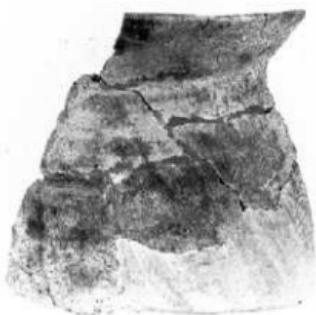
18-12

18-14



18-15

18-16



20-6



20-2

図版10 寝鹿遺跡



19-4



19-7



19-2



19-5



19-10



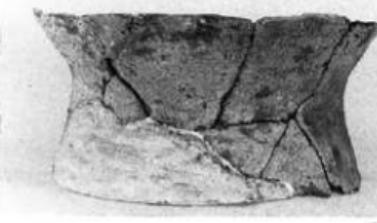
19-9



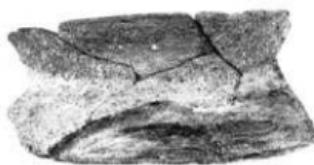
19-3



20-3



20-4



19-6



20-8



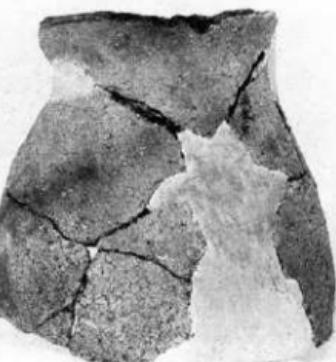
20-5



19-1



20-7



29-1



21-7



21-5



21-2



21-6



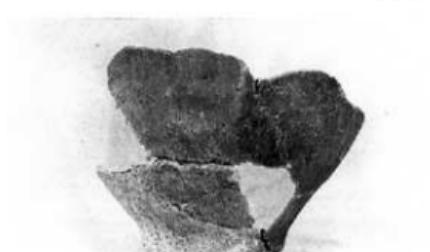
21-12



21-4



21-10



21-9

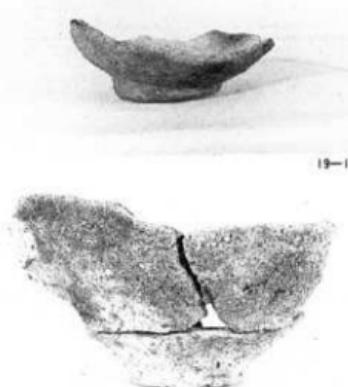


21-8

図版12 賽鹿遺跡



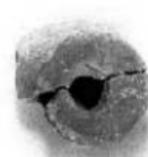
19-1



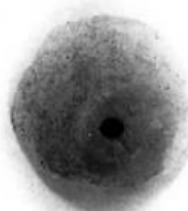
21-3



21-11



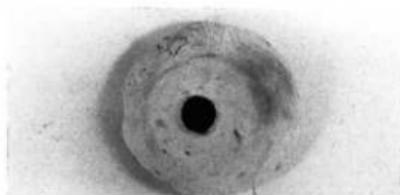
22-2



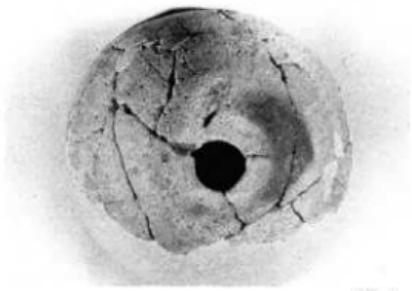
22-1



22-5



22-3



22-4



22-7

22-6

図版14 寝庭遺跡



22-8



22-9



22-10



23-4



23-2



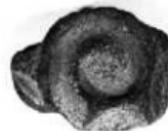
23-1



23-3



23-5



S D 23より出土、縄文（中精）土器片



23-8

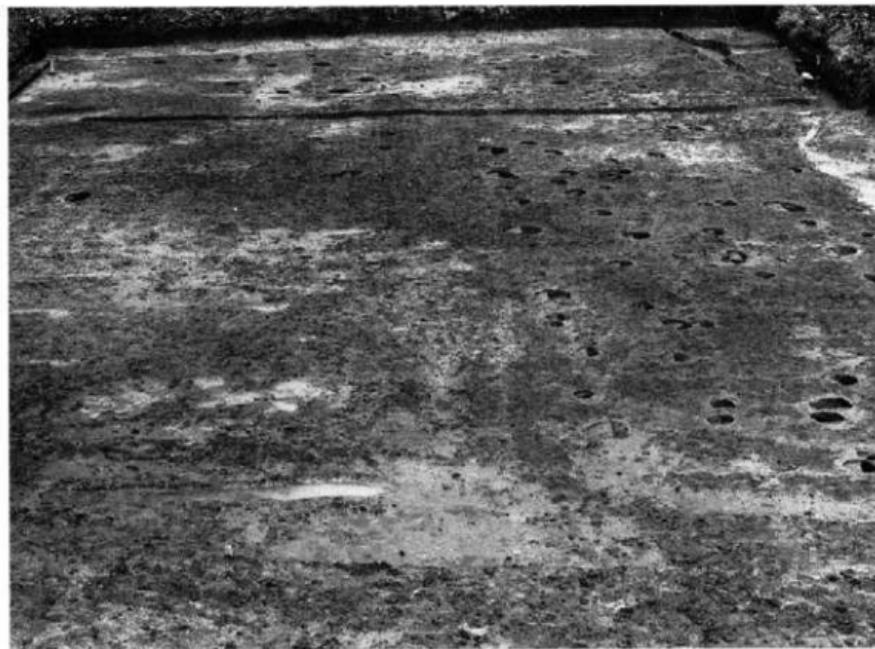
23-7

23-9

図版15 契約塙遺跡



遺跡近景（東から）



遺構全景（西から）

図版16 契約塙遺跡



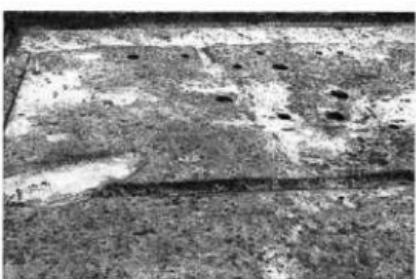
遺構検出状況（西から）



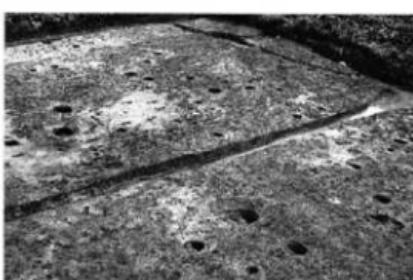
遺構検出状況（北西から）



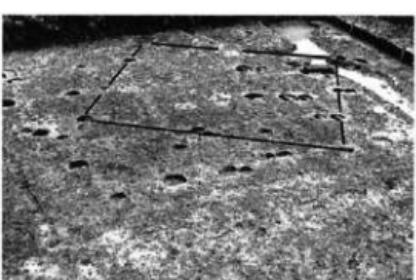
遺構検出状況（北西から）



SD 33・35（西から）



SD 33・34・35・36（北西から）



SB 127建物跡全景（北東から）

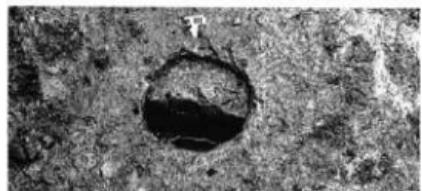


ピット群（西から）



SD 34遺物出土状況（西から）

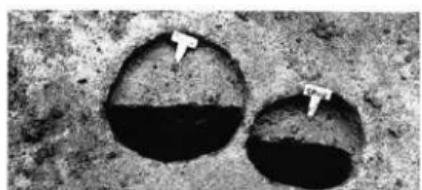
図版17 契約壙遺跡



E P III



E P 89



E P II8 - II9



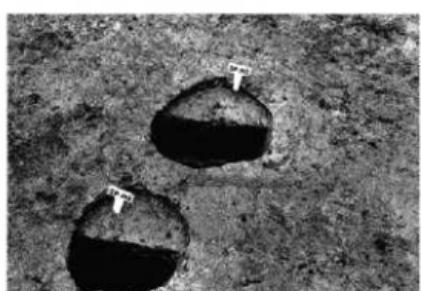
E P 92



E P II0



E P 101



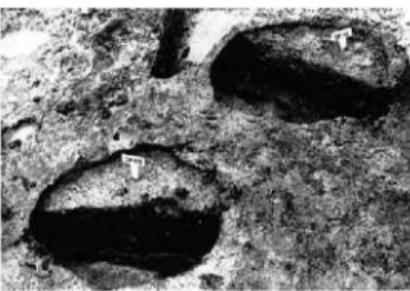
E P 103 - 104



E P 96 - 97

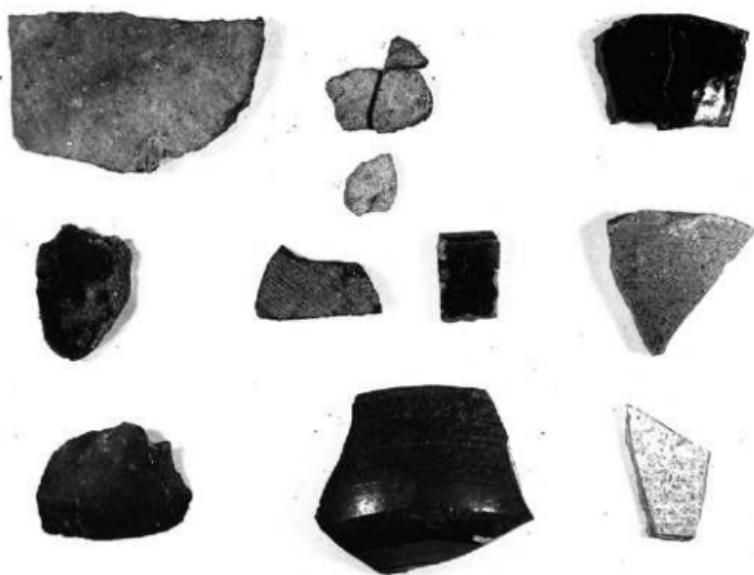


E P II4

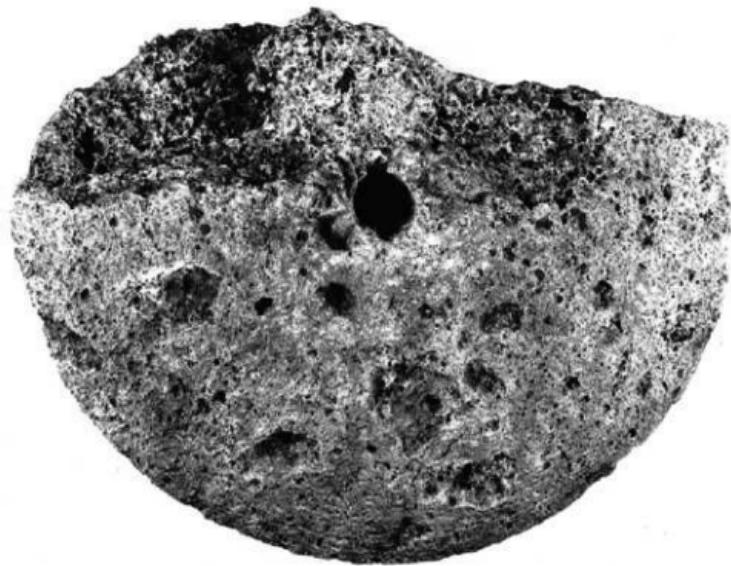


E P II6 - II7

図版18 契約壇遺跡



契約壇出土遺物 (1/2)



契約壇出土遺物 (1/2)

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第112集

ねじか けいやくだん  
寝鹿・契約壇遺跡

発掘調査報告書

昭和62年3月20日 印刷  
昭和62年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 山形印刷株式会社

---